



平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査



序

昭和39年に平城宮跡発掘調査部が発足して20年を経過した。発足後10年間は、平城京の大規模発掘は国道24号線バイパスと奈良市庁舎の2件であり、成果は学報として刊行した。その後、今日に至る10年間において、平城京調査の件数は急激に増え、ここ10年間に100m²を超える発掘が15件、500m²以上のものを含むと32件に達している。これらの多くは単独の報告もしくは概報として刊行しており、大路小路の割りや宅地内建物群の状況を明らかにしてきた。

しかし、いずれも開発に伴なう事前調査であり、坪内の大部分を全面発掘した例は少ないから、坪内の状況を明らかにするには一定の限界があると言わざるをえない。改めて、計画的で組織的な調査の必要性が痛感されるのである。

本書は、8世紀はもとより平城京廃絶後200年間にわたってこの地が家地として利用されたことを明らかにしているが、発掘面積の関係もあって多くの問題を残している。一方、本調査区の西隣の坪は、奈良市の調査により純柱の廊状建物、曲池を検出した左京二条二坊十二坪にあたり、この両調査区の間の未発掘地にも、開発の波が眼前に迫っているようである。予想される隣接した重要遺跡について、計画的な調査が行なわれ、保存についての施策がとられるためにも、本書は重要な資料を提供できるであろう。

1984年3月

奈良国立文化財研究所長
坪井清足

目 次

	頁
I 調査の経過と概要	1
II 遺 構	
1 遺 跡 の 概 觀.....	2
2 第 1 次の調査.....	6
3 第 2 次の調査.....	7
4 第 3 次東の調査.....	8
5 第 3 次西の調査.....	10
III 遺 物	
1 土 器.....	12
2 瓦 塼 類.....	26
3 木漆器、金属製品.....	36
4 木 筒.....	40
IV まとめ	41

写真図版

PL. 1	調査地周辺航空写真	PL. 8	SK2270出土土器
PL. 2	(1)第1次調査区全景 (2)第1次調査区遺構	PL. 9	SK2270出土土器
PL. 3	第2次調査区全景	PL.10	第2次・3次出土土器
PL. 4	(1)第3次東調査区全景 (2)SK2690・SD2699	PL.11	SK2800出土土器
PL. 5	(1)SB2630・SB2631 (2)SB2660・SB2670	PL.12	軒丸瓦
PL. 6	(1)第3次西調査区全景 (2)第3次西調査区東半部	PL.13	軒丸瓦
PL. 7	(1)SD2740 (2)SX2720	PL.14	軒丸・軒平瓦
		PL.15	軒平瓦
		PL.16	木製品
		PL.17	漆絵
		PL.18	木筒・墨書き器

攝 図

	頁
fig. 1 発掘区周辺の地形・条坊 及び遺構図	
fig. 2 平城京左京二条二坊十三坪位置図・1	
fig. 3 左京二条二坊十二・十三坪及び三条 二坊十五坪の遺構図と50尺方限	3
fig. 4 左京二条二坊十三坪の 発掘遺構図	4・5
fig. 5 第1次調査遺構図	6
fig. 6 第2次調査遺構図	7
fig. 7 第3次東調査遺構図	9
fig. 8 第3次西調査遺構図	11
fig. 9 SK2270出土土器実測図(1)	13
fig. 10 SK2270出土土器実測図(2)	15
fig. 11 第1次調査出土土器実測図	17
fig. 12 第3次東調査出土土器実測図	19
fig. 13 第2次調査出土土器実測図	21
fig. 14 SK2800出土土器実測図	23
fig. 15 第3次西調査出土土器実測図	25
fig. 16 軒丸瓦拓本	27
fig. 17 軒丸瓦・文字瓦拓本	29
fig. 18 軒平瓦拓本	31
fig. 19 木製品実測図	37
fig. 20 金属製品他実測図	38
fig. 21 とりべ・ふいご・羽口実測図	38
fig. 22 漆繪実測図	39
fig. 23 十三坪建物配置変遷図(1)	41
fig. 24 十三坪建物配置変遷図(2)	42
fig. 25 十三坪建物配置変遷図(3)	43

表

	頁
tab. 1 第1~3次調査の面積・期間	1
tab. 2 A~C期建物・塀一覧表	4
tab. 3 D~F期建物・塀一覧表	5
tab. 4 軒瓦の編年および同窓関係	35

例 言

- 1 本書は奈良市法華寺町に位置する平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査報告である。
- 2 調査は、奈良県教育委員会の委託を受けて、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1982年2月から1983年11月まで3次にわたり実施した。
- 3 本報告は、1次から3次にわたる調査の成果を収録しまとめたものである。
- 4 本書の作成は、岡田英男調査部長の指導のもとに、以下の者が当り、執筆者全員の討議を経た。
I・II-1・II-5・III-1・IV：山崎信二、II-2：杉山洋、III-3：松村恵司、
II-4：宮本長二郎、III-2：岩永省三、III-3：金子裕之、III-4：寺崎保広
- 5 遺構・遺物の写真は八幡扶桑、佃幹雄が担当した。
- 6 本書の編集は山崎信二が担当した。
- 7 本書の作成にあたり奈良市教育委員会より、平城京左京二条二坊十二坪の発掘遺構図
及び調査地周辺の航空写真的提供を受けた。

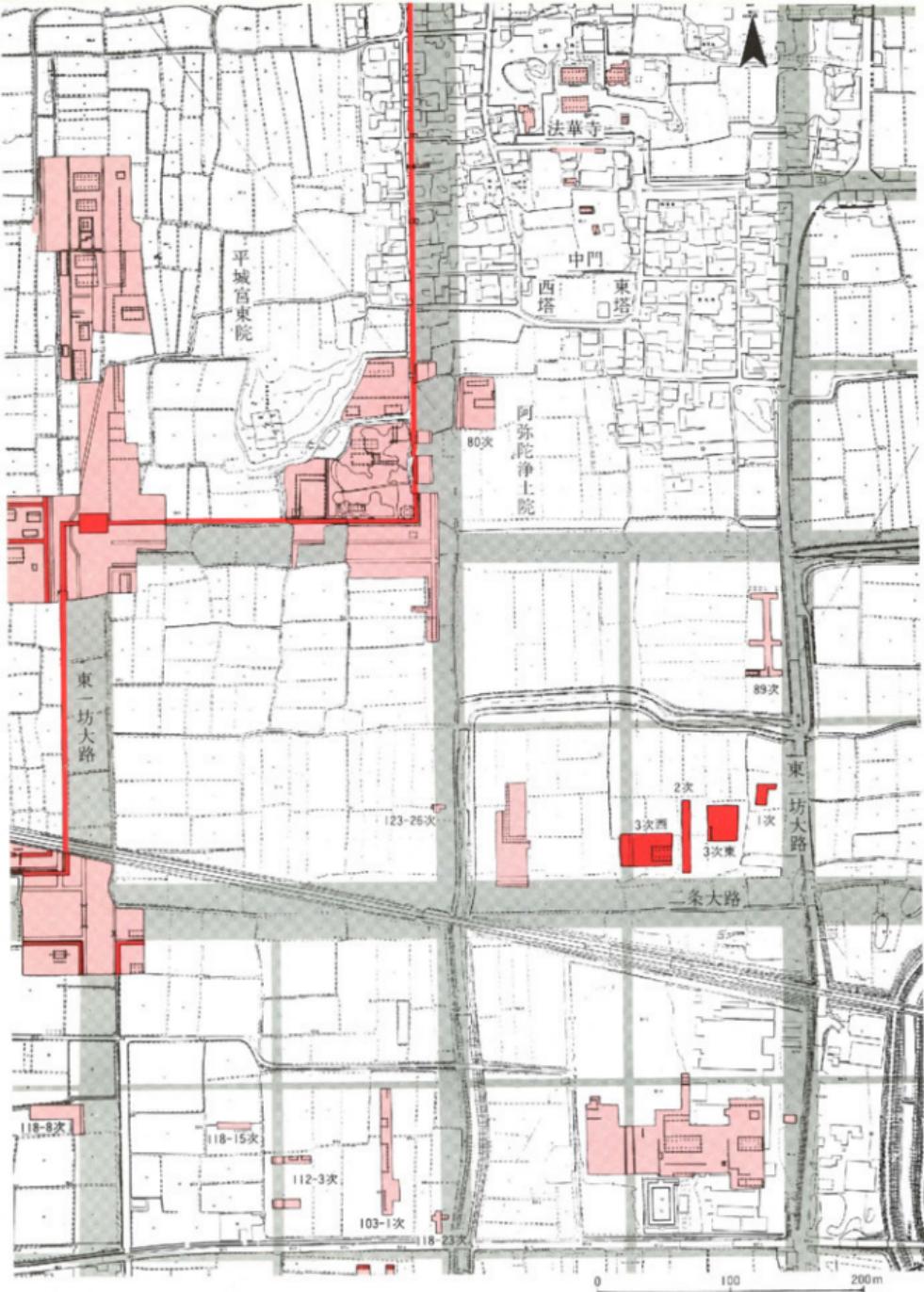


fig. 1 発掘区周辺の地形・条坊及び遺構図

I 調査の経過と概要

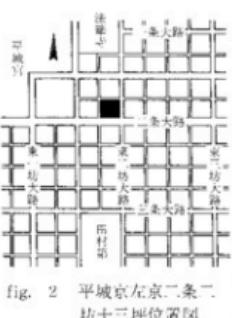


fig. 2 平城京左京二条二坊十三坪位置図

この報告書は平城京左京二条二坊十三坪において、3次にわたる発掘調査を行なった報告である。

第1次は、レストラン・シャロン建設に伴なう事前調査。第2次は宅地造成の申請を受けて事前調査したもの。第3次はホテル建設に伴なうもので、ホテル建設地(第3次東)は、第2次調査地を含む、その西にホテル用の駐車場とプールの建設が予定されたので(第3次西)併せて事前調査したものである。第1次は平城宮跡発掘調査部の第131-31次に、第2次は141-5次に、第3次は151-11次にそれぞれある。発掘面積・調査期間はtab. 1 のとおりである。

調査地は、平城京三条坊では左京二条二坊十三坪にあたり、南面を二条大路、東面を二坊大路で囲んでいる(fig 1)。西隣の坪は、奈良市水道局建設に伴なう奈良市の発掘調査で、縦柱の廊状建物・曲池・築地・二条大路北側溝を検出した左京二条二坊十坪⁽¹⁾にある。北隣の坪は、二条二坊十四坪にあたり、第89次の調査で東西棟建物と塀を検出し、金属工房関係の遺物が出土している。二条坊間路を隔てて北西の左京二条二坊十坪の位置には、阿弥陀淨土院がある。阿弥陀淨土院は第80次調査で、東西棟の礎石建物とその北方に南廻付の僧坊風掘立柱建物を検出している。阿弥陀淨土院の西は平城宮東院に隣接、北は法華寺に隣接する。本調査区の南に目を転じると、二坊南に左京三条二坊十五坪⁽²⁾がある。十五坪は、坪の中心部分を全面発掘し、8・9世紀における坪内の遺構変遷が明らかになった貴重な遺跡である。十五坪の二坊西は、三条二坊七坪にあたり、ここでは103-1次、112-3次、118-23次の調査で、東二坊坊間路側溝・坊境小路・掘立柱建物を検出している。

以上のように、左京二条二坊十三坪の地は、奈良時代において、平城宮の東南約300mの地点に位置を占め、南限を二条大路、東限を二坊大路で囲む好地を占めていた。

1 西崎卓哉『平城京左京二条二坊十二坪』『奈良県観光』321号 1983年8月

2 奈文研『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1975年4月

3 奈文研『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)』 1973年5月

4 奈文研『平城京左京三条二坊』奈文研学報第25編 1975年10月

次 数	調査 地 区	面 積	調 査 期 間	所 有 者	発 掘 担 当 者
1次(131-31)	法華寺町250 1・251・252	170m ²	'82 2.8~2.23	鈴木 勝	杉山 洋
2次(141-5)	法華寺町256	275	'82 5.10~5.26	杉本繁次郎	松村恵司
3次東(151-11)	法華寺町259	800	'83 8.29~9.16	加門 正一	宮本長二郎
3次西(151-11)	法華寺町263	1,000	'83 9.2~10.21	杉本繁次郎	山崎信二

tab. 1 第1~3次調査の面積・期間

II 遺構

1 遺跡の概観

土層 調査地の基本的な層序は現水田耕土・床土下に灰色砂層と茶褐色砂質土がある。砂層が明瞭なのは1次、2次、3次東の発掘区であり、調査地の北方では40~50cmの堆積を示す。北方に位置する滋川の氾濫によるものであろうが、砂だけの堆積は少なく粘質土も混じており、数度にわたる氾濫によるものである。3次西の発掘区では砂層がなく、床土が厚く堆積する。砂質土及び床土の下には、灰色粘質土が約30cmの厚さで堆積する。この層には遺物が少ないが、中世末から近世の水田床土と考えられる。灰色粘質土の下には遺物包含層である暗灰色粘質土層があり、その下に茶褐色地山がある。暗灰色粘質土層は奈良・平安時代の遺物を多く含むが、中世の土器も若干混じっている。中世の上地群は、暗灰色粘質土層の上面から掘りこむものが多いが、下層から掘りこむものもある。奈良・平安時代の掘立柱建物、溝はいずれも茶褐色地山面で検出した。茶褐色地山面である遺構検出面は、4つの発掘区とも現地表下1.4~1.6mである。標高でみれば、おおむね60m±10cm以内におさまる。

古代の遺構 遺構は左京二条二坊十三坪内に形成されたもので、奈良時代の初期から平安時代の中期におよぶ期間に属し、A・B・C・D・E・Fの6期に区分できる。A~E期の基本的な建物配置は、主屋と廻屋を1棟ずつ配する点にある。A~C期では二条大路よりに建物が配され、D~E期では二坊大路よりに建物を配する。

左京二条二坊十三坪の南北・東西幅 本調査で検出したS F2760の心は、平城宮朱雀門心から国土方眼方位で東へ931.020mの地点にある。この距離を条坊計画による1坊幅(1,800尺)+3坪幅(1,350尺)=3,150尺で割ると、1尺29.56cmの値が得られる。この数値を基準にして、東二坊坊間路をみると、123~26次の西側溝東肩より2m東が条坊計画線となる。これは宮に接する坊間路を幅広くとり、他を狭くとったため矛盾はない。次に東二坊大路は左京三条二坊十五坪の調査で西側溝を検出しており、その後の調査成果はない。従って報文のとおり、左京二条二坊十三坪も三条二坊十五坪と同じく、東西幅は坪の計画幅(450尺)一小路25幅(10尺)一大路25幅(30尺)=410尺としておく。次に二条大路であるが、宮東南隅の32次の調査では溝心々38mであり、左京二条二坊十二坪における奈良市の調査では溝心々32mとなり、宮に接する二条大路の南側溝にくらべ、二条大路の南側溝が6m北へ位置することになる。この位置での二条大路心と、左京三条二坊十五坪での坪境小路心との距離は135mとなり、450尺で割ると1尺=30.0cmの値が得られる。従って溝を含まず、路幅だけをとると、南北幅は坪の計画幅(450尺)−二条大路25幅(50尺)−小路25幅(10尺)=390尺となる。

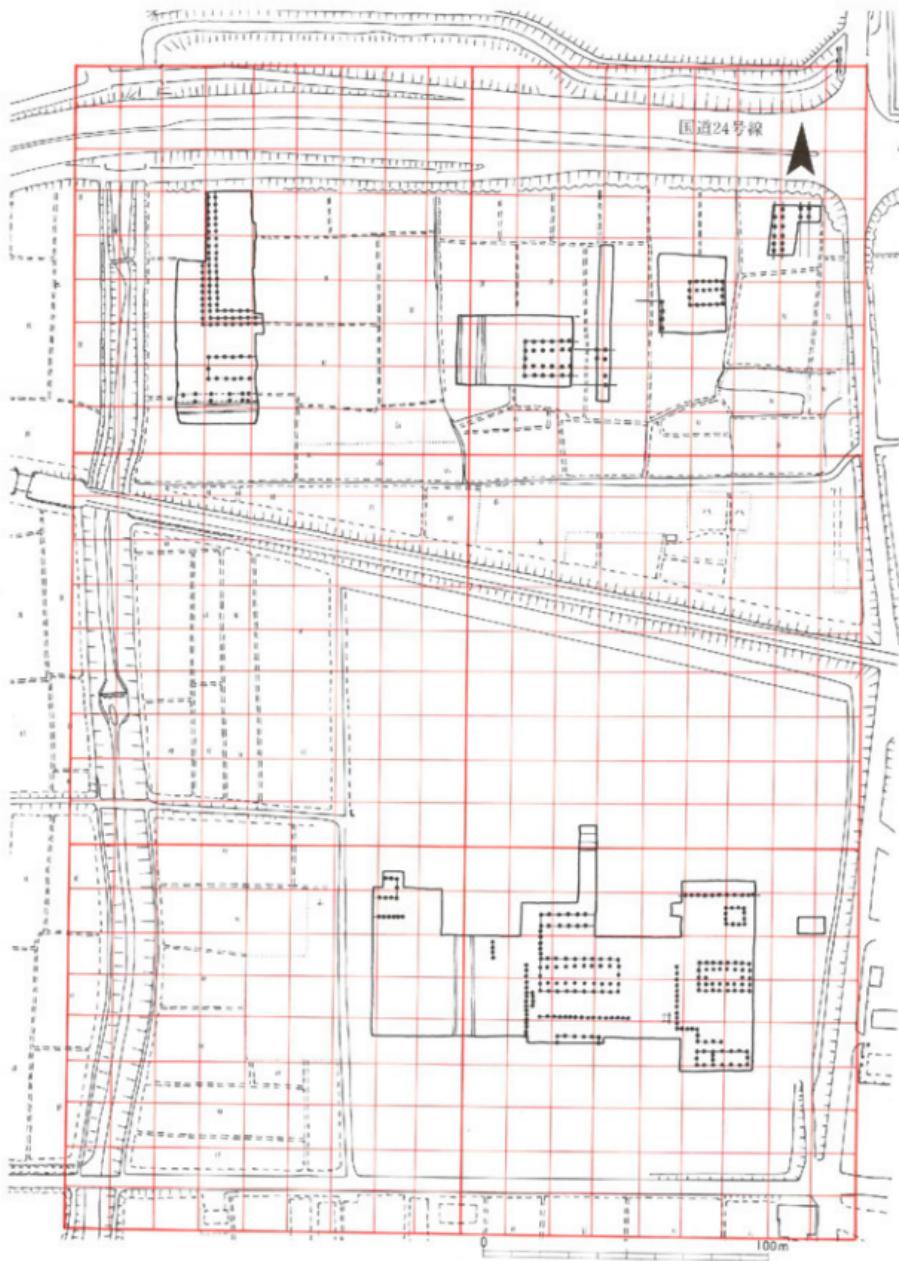


fig. 3 左京二条二坊十二・十三坪及び三条二坊十五坪の遺構図と50尺方眼

寺 墓	建 物	種 方 向	幅・高	断面(木尺)	梁行(木)	間 (尺)	備 考
A	S B2790	E・W	9.0×4	N-S	14.8(50)φ	11.8(48)	3.0(10)
	S B2850	E・W	3.0×4	φ		9.7(33)φ	3.6(12)
	S A2773	E・W	2.0		4.8(16)		
B	S B2863	E・W	4.0×4	N-S	11.5(40)φ	11.8(48)	3.0(10)
	S B2710	N・S	6.0×2	φ	17.7(60)φ	5.9(20)φ	2.0(10)
	S B2669	E・W	3.0×3	φ	8.0(27)φ	8.4(25)	2.1(7.5)
	S B2629	E・W	2.0×3	φ	3.5(12)φ	6.0(21)	3.1(7.5)
	S B2566	E・W	1.0×2		2.1(7)φ	3.6(16)	
	S A2367	E・W	1.0		2.1(8)φ		
C	S B2860	E・W	4×2		10.7(36)	4.7(16)	
	S A2364	N・S	3		6.3(21)		間仕切り
	S B2845	N・S	φ×2			5.4(18)	
	S B2661	N・S	φ×2			4.5(15)	
	S B2364	E・W	2.0×2		3.0(10)φ		
	S B2293	E・W	1.0×2		2.7(9)φ	3.0(10)φ	

tab. 2 A ~ C 期建物・塀一覧表

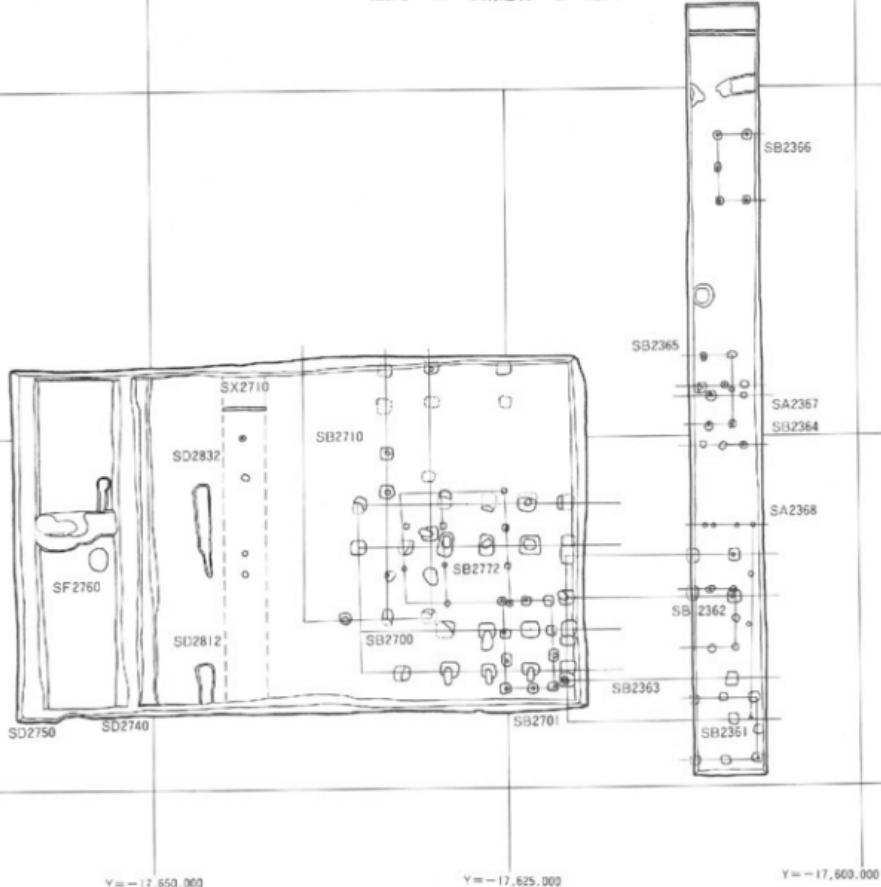
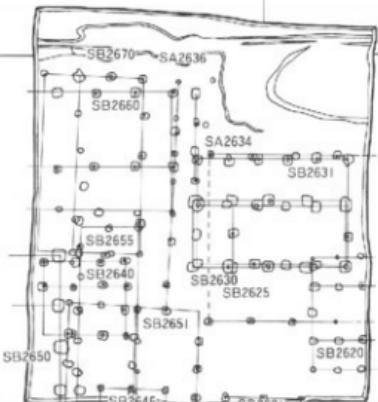
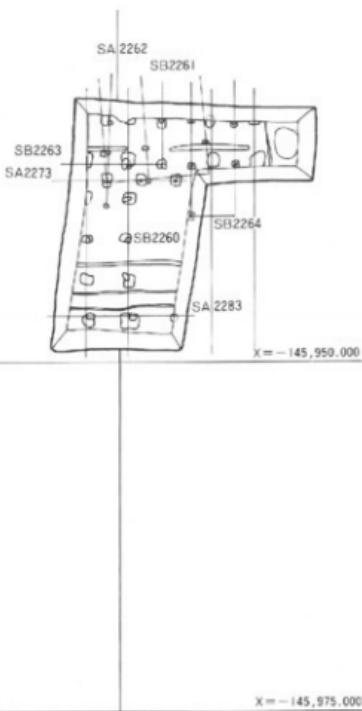


fig. 4 左京二条二坊十三坪の発掘遺構図



地 點	記 號	種 類	方 向	規 格	面 積	柱 距(m)	梁 距(m)	牆 厚
D	S B263	N - S		5×4 E-W	14.7(50)η	11.9(40)	2.9(16)	
	S B2631	E-W		5×3 N	10.5(35)	7.4(25)	3.2(11)	
E	S B265	E-W		3×4 N-S	8.5(30)η	11.9(40)	2.6(9)	
	S B2670	N-S		5×3 W	12.6(39)	9.8(33)	2.6(9)	
	S B2655	E-W		1×2	1.8(5)η	4.9(16)		
	S B2682	E-W		1×2	1.8(5)η	4.2(14)		
	S B2681	N-S		3×2	6.3(21)	3.6(16)		
	S B2684	N-S		2×1	6.5(22)		3.0(16)	
	S A2393	E-W		2×2	6.1(23)			
F	S B261	N-S		2×2 W	4.8(15)η	7.2(31)	3.0(16)	
	S A2262	N-S		3×2	6.1(21)η			
	S B2651	N-S		3×4	5.6(19)η	9.0(30)		
	S A2396	N-S		6	16.5(56)			
	S B2640	E-W		3×3 N	5.7(19)	5.4(18)	1.8(6)	
	S B2655	N-S		5×2	10.5(35)	4.6(14)		
	S A2398	N-W N-S		6×W=2×8	15×W=3.4	N-S=13.8		
	S B2381	E-W		2×2	4.3(14)	4.3(14)		
	S B2772	N-S		3×3 W	8.3(27)	4.3	2.5-2.7	

tab. 3 D ~ F 期建物・塀一覧表

X = -146,000.000

Y = -17,575.000

Y = -17,550.000

0 10 20m

2 第1次の調査

検出した主な遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀3条、素掘溝4条、土塙4基である。

A期 塀S A2273、溝S D2265、S D2266・2282、土塙S K2270がこの期に属する。S D2282は幅1.2m、深さ15cmの素掘溝で、十三坪を南北に2分する。S D2265・2266は深さ6cmの浅い溝で、一条の東西溝の底だけが残ったものである。この溝とS A2273とは、十三坪北半の宅地の南限を画する施設であろう。S K2270は断面が鉢鉢状の土塙で、多量の土器や瓦と共に輪羽口が出土した。北隣の十四坪東辺の調査(89次)でも同時期の土塙が南北に連なって検出されている。

B期 S D2282は存続する。A期・B期とともにこの地域には建物遺構はない。

C期 十三坪の南北を2分する機能は、幅30cm、深さ10cmの素掘溝S D2281に受け継がれる。S B2263は坪北半部に属する掘立柱建物で、柱間は東西方向9尺、南北方向10尺である。S K2286・2287は不整形の浅い土塙で、土器と共に輪羽口、るつば、漆付着土器が出土した。埋土中には炭化物、炉壁と思われる焼土塊が多量に入っていた。この他にも、S K2287周辺には炭化物の詰った小穴や溝状遺構があり、溝状遺構からは焼けた栗石が出土した。近くに金属関係工房の存在が推定されよう。A期～C期は坪が南北に2分して使用されており、南北分割線上に位置する本調査区には、東西方向の溝、塀以外には主要な建物遺構は存在しない。

D期 南北棟二面廻付掘立柱建物S B2260が建つ時期。S B2260は桁行5間分を検出し、梁行4間、柱間10尺等間である。D期建物群の主屋に相当する建物である。

E期 S B2264、S A2283がこの期に属する。S B2264は南北棟掘立柱建物になるとされる。桁行の柱間が10～11尺と不揃いで、柱痕跡も小形である。

F期 S B2261は西廻の付く南北棟掘立柱建物で、柱間は桁行8尺、梁行7尺、廻の出10尺である。方位が北で07°西へ振れており、柱もやや不揃いである。S B2261廃絶後、柱間6尺～7尺の南北柵S A2262が建てられる。

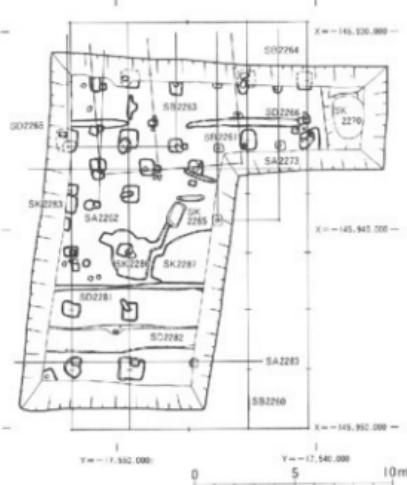


fig. 5 第1次調査遺構図

3 第2次の調査

幅5m、長さ55mの南北に長い発掘区を設定して、掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、溝1条、井戸1基、土塙11基を検出した。

A期 S D2370は幅0.6mの素掘りの東西溝。1次調査でも東側延長部を検出している。十三坪を南北に二分する位置にある。S E2371は深さ1.6mの井戸で、径1.5mの整った円形掘形をもつ。井戸枠は抜かれている。埋土中から平城IIの土器(fig.13-89)が出土した。S E2371は3次調査S B2650の北側柱列延長線上にある。

B期 大形の掘立柱建物S B2363に代表される時期で、塀S A2367、+建物S B2366が共存し、A期のS D2370も存続する。S B2363は南北二面廻付建物。身舎の梁間20尺、桁行柱間および廻の出は10尺である。一辺1m近い方形の柱掘形を6箇検出した。該期の十三坪内における中心的建物と考えられる。S A2367はこの建物から40尺離れて設けられた目隠塀で、西側の柱穴には柱根が残り、周囲を挙大の礎で固めた工作がみられる。S B2366は東西棟建物の西妻部分。一辺0.6m前後の方形掘形の中に径20cmの柱根が残る。この建物の北側柱列は大形建物S B2363の北廻から100尺の位置にある。

C期 B期の建物は存続するが、東西廻を廃して掘立柱建物S B2364が建てられる。S B2364は5尺等間の南北両側柱列を検出した。梁間は15尺を測るところから梁行3間の東西棟建物となろう。

E期 大形建物S B2363は既に廃絶され、同位置に桁行2間以上、梁行2間の東西棟建物S B2362が建ち、S B2362の北40尺には東妻の柱筋を撤えてS B2365が建つ。ともに桁行が6尺、梁行はS B2362が7尺、S B2365が8尺等間である。S B2362の柱穴埋土中からは縁釉片が出土。北端には3基の土塙がある。S K2382は3次調査で検出したS D2699の西側延長線上にある。埋土中に木炭屑の堆積があり、S K2379出土破片と接合する縁釉坏(fig.13-100)を出土しており、灰釉耳皿を出土したS K2376とともに一連の遺構である。

F期 S A2368は12尺等間の逆L字形の塀。柱の掘形は小さく、南北列は北で東に振れる。調査区南端で検出した7尺等間の東西棟建物S B2361もその位置から二条大路に面する築地が廃絶してからの建物と考えられる。北で西に振れる。

G期 調査区北半で検出した8基の土塙は、土採りのために掘られた穴で、S K2377出土土器から13世紀末頃に位置付けられる。

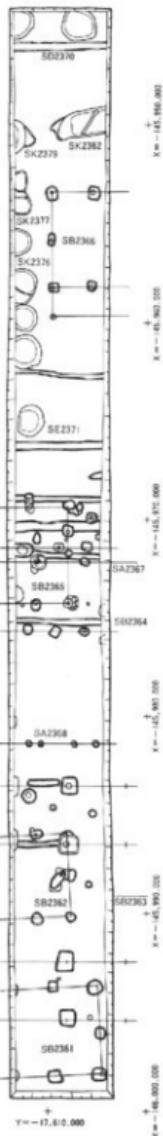


fig. 6 第2次調査遺構図

4 第3次東の調査

発掘区の土層は、上から耕作土(約20cm厚)、床土(黄褐色土・黄褐色土バラス混り、25~30cm厚)、堆積層(灰茶褐色土・灰色粘土、55~60cm厚)、遺物包含層(約20cm厚)の各層が約130cmの厚さに堆積し、遺物包含層直下の地山面上(黄褐色粘土)に遺構を検出した。検出した主な遺構は、建物12棟、塙2条、溝1条、土坑などがあり、遺構の重複状況や位置関係からA~F期の6期に区分できる。

A期 S B2650を発掘区西南隅に南北3間分の側柱列として検出した。柱間寸法は北端間12尺、他柱間10尺である。この柱列は東西棟または南北棟建物の東側柱の北3間分にあたり、柱間寸法のとり方からみて、東西棟の北廂付または南北2面廂付建物の可能性が強い。桁行柱間寸法は分らないが梁行と同じ10尺等間とすると、発掘区西方の2次発掘区までは延びていないので、東西5間と推定される。

B期 S B2620・2660の2棟がある。S B2620は発掘区東南隅に検出された東西3間以上、南北4間の東西棟三面廂付建物である。柱間寸法は桁行5.8尺等間、梁行6.5尺2間、南北面廂の出7尺、西面廂の出7.5尺である。西・北面廂は、遺構面の削平が大きく、柱痕跡のみを残し、柱掘形は消失したものと思われる。なお、東方未発掘区において、この建物の東面にも廂が付けば四面廂となる。S B2660は発掘区西北部に検出した桁行3間以上、梁行3間の東西棟兩廂付建物である。柱間寸法は身舎9尺等間、廂の出10.5尺である。

C期 建物3棟S B2621・2630・2645と塙1条S A2634がある。S B2621とS B2645は発掘区南端に北側柱のみを検出した南北棟建物で、柱間寸法はS B2621が9尺2間、S B2645では東柱間8尺、西柱間7尺である。S B2630は発掘区の中央東寄りに検出した桁行4間、梁行2間の東西棟建物である。S B2631の身舎とはほぼ同規模・同位置に重複しS B2630の方が占い。S B2630の西妻中央柱はなく、1間東寄りに間仕切りの柱を立てているので、西妻2間分を開放して間仕切り位置に出入口を設けたものと考えられる。柱間寸法は桁行9尺、梁行8尺。柱穴から半城Ⅲ・Ⅳ期の土師壇、須恵環盞が出土。S B2634はS B2630の西妻側柱に取り付いて北に延びる柱間3間、7尺等間の塙である。

D期 S B2631は桁行5間、梁行3間の東西棟北廂付建物で、柱間寸法は身舎7尺等間、廂の出11尺である。S B2630とは身舎部分が同位置で、連続して建替えたものと考えられる。柱穴からは平城V期の土師皿出土。

E期 S B2625・2670、S K2690、S K2680がこの期に属する。S B2625はD期のS B2631と重複し、S B2625の方が新しい。S B2625の残存遺構は南北の廂側柱のみで、身舎部分は礎石または土台建てのため痕跡を残さないものと考えられる。廂は掘立柱で桁行3間以上、柱間寸法10尺等間で、南北側柱間の間隔は40尺であるから、身舎・廂の出とも10尺等間の東西棟建物と推定される。S B2670はS B2625の西に約5m離れて建つ桁行5間、梁行3間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行北2間9尺、南3間8尺、身舎梁行7尺、廂の

出9尺である。廻柱は両端のみ残存し、中間部は後世の土塙により攪乱を受けている。身舎内部には北2間と南3間を区画する間仕切柱がある。柱穴からは9世紀中～後半頃の綠釉陶器が出土。S D2699は発掘区北端で検出した東西溝でその終末期には土塙SK2690と一体となって廃絶している。溝幅50～70cm、深さ20cm程度で、西から東に流れる。溝の南側溝が南に抜がって大土塙SK2680を形成している。SK2690及びSD2699からは9世紀中～後半頃の灰釉陶器が出土。

F期 建物S B2640・2651・2655と塙S A2636の時期である。3棟の建物は発掘区西南部で重複してさらに3小期に区分される。柱穴の重複では、SB2651よりもSB2655が新しく、SB2640との前後関係は不明であるが、出土土器形式からはSB2640が最も新しいものと考えられる。SB2651(F₁期)は桁行3間以上、梁行4間の南北棟建物で、棟通りに柱が立ち、梁行を東西に2等分する珍らしい平面形式をもつ。柱間寸法は桁行7尺、梁行7.5尺である。北側柱の東端から1間に塙S A2636が取り付く。S A2636は柱間7間の南北塙で、柱間寸法はSB2651との取付部柱間から北に6・11・7・7・7・8.5・8.5尺である。この塙とSB2651は北で東に大きく振れている。塙の東11尺に並行する板杭列SX2637も同じ振れをもつことから同時期であろう。SB2655(F₂期)は桁行6間以上、梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行北端間4.5尺、他柱間7.5尺、梁行6.5尺である。柱穴から黒色土器A(杯)が出土。SB2640(F₃期)は桁行3間、梁行3間の南北棟東廂付建物。柱間寸法は桁行6尺、身舎6.5尺、廻の出5尺で、身舎内部に床東がある。柱穴からは10世紀前半～中頃の土師皿が出土。

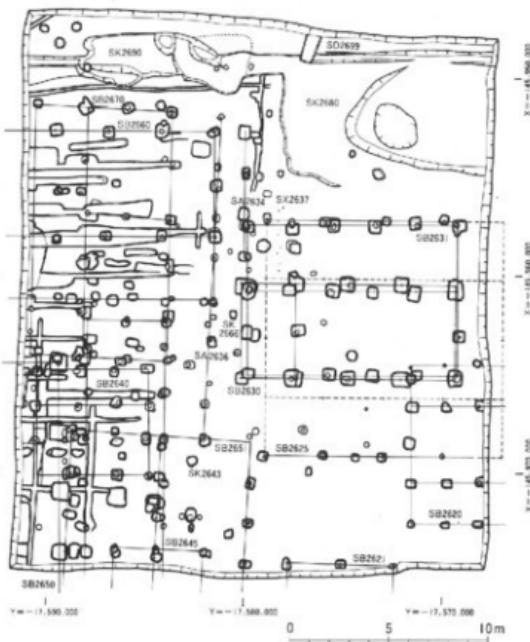


fig. 7 第3次東調査遺構図

5 第3次西の調査

検出した主な遺構は掘立柱建物5棟、溝5条、木樋1条、道路1条、土塙3がある。鎌倉以降の土塙が131基あるが、この土塙群の個々については記述を省略する。

A期 建物S B2700、坪境小路S F2760、東側溝S D2740、西側溝S D2750、土塙S K2800がある。S B2700は発掘区東で検出した南北二面廂付東西棟建物で、桁行5間以上、梁行4間で、柱間寸法は身舎、廂の出とも10尺等間である。柱掘形は身舎で1.3×1.1m、深さ0.4~0.6m、廂では方1m前後、深さ0.5~0.6m。身舎南側柱列、南廂柱列では柱抜取痕跡が南に延びる。西側の妻中央柱は土塙S K2764によって破壊され、検出していない。

S D2740は南北方向の溝で、S F2760の東側溝。幅3m。深さは西幅2m部分が70cmと深く、東幅1m部分は20cmと浅い。溝内には暗青灰粘質土が堆積し、少量の遺物を含む。S D2750は南北方向の溝で、S F2760の西側溝。幅2m以上で、西涓は未検出。深さ60cm。溝内には暗青灰粘質土が堆積。S F2760は十二・十三坪境小路で、南北方向の道路。路面幅4.8~5.2m。路面舗装の痕跡はなく、地山面で検出。なお、S D2740とS D2750との重心距離は7.5~8m。S D2875は、東西両側溝を横に連結する東西方向の溝。幅1.5~2m、深さ20cm。東西両側溝の水量を調節する溝と考えられる。S K2800はS F2760上にある土塙。埋土中から多量の土器(平城II期)が出土。

B期 建物2棟S B2363・2710、木樋S X2720、土塙S K2870・2801がある。S B2363は発掘区東南隅に南北3間分の側柱列として検出したもの。この柱列は、2次調査で検出した東西棟建物の西側柱列にあたり、柱間寸法は身舎・北廂とも10尺等間である。2次調査検出の柱穴と併せると、南北二面廂付東西棟建物で、桁行4間以上、梁行4間となる。北側柱の北端から3番目の柱穴で平城II・III期の須恵器杯・蓋が出上。北端から4番目の柱穴には、板を5枚重ねた礎板があった。S B2710は発掘区中央に東廂側柱列、身舎東側柱列として検出した南北棟建物で、身舎西側柱列は後世の土塙により攪乱をうけ、消失している。身舎南妻中央柱は検出。身舎東側柱列は南端から3番目を除く6箇所で柱穴を検出し、桁行6間以上となる。東廂側柱列では南端から1~3番目のみ検出し、以北は後世の土塙により消失。柱間寸法は身舎・東廂とも10尺等間である。S X2720は、1枚の底板と南北両側辺に各1枚の側板を置く施設であり、木樋。底板は長さ3m、幅30cm、厚さ1.5cm。側板は高さ4cm。木樋掘形は、幅40cm、深さ15cmで、地山面に掘り込む。木樋S X2720を据える地山面上は、S D2832・2812溝上端地山面より約20cm高く、一段高い地山面が南北に連なる。築地七をとどめないが、S D2832・2812は築地の西側溝、S X2851・2845・2829・2827が築地寄柱の痕跡である可能性がある。S K2870は深さ7~14cmの浅い土塙で、埋土に焼土を含む。埋土中より平城II・III期の須恵器杯蓋が出上。漆絵漆器はS K2870上端とその上層にある包含層(灰色粘質土)との境目より出土。S K2801は深さ60cmの土塙で、S D2875上にあり、S D2875より新しい。少量の土器が出土。

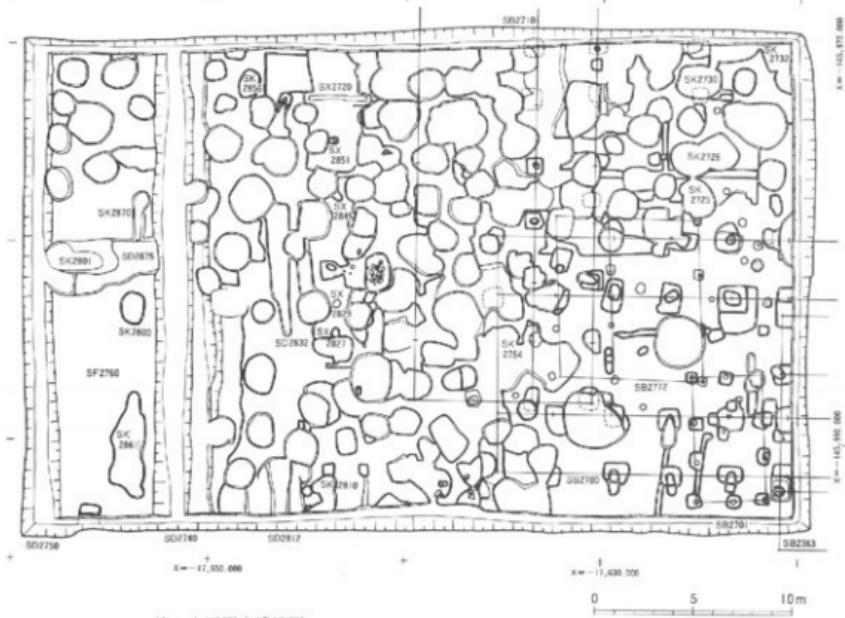


fig. 8 第3次西調査遺構図

C期 S B2790は発掘区中央北半に南北3間分の2列の柱穴として検出した。柱間寸法は8.3尺(2.5m)等間。西側の柱列は、北端の柱に柱根が残り、北端から1間目、3間に柱穴を検出。東側の柱列は北端と北端から1間に柱穴を検出。西側と東側との柱列の寸法は16.6尺(5m)。柱間寸法のとり方からみて、東西棟の北廂付建物または2間×3間以上の南北棟建物が考えられる。西側及び東側の柱列とも後世の土塙によって多くが破壊されており、南北・東西両棟いずれとも決め難い。

E期 S B2701がある。S B2701は桁行3間、梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行7尺、梁行6尺である。柱掘形は方50~70cm前後で、掘形埋土から灰釉陶器が出土。

F期 S B2772がある。S B2772は桁行3間、梁行3間の南北棟西廂付建物で、柱間寸法は身舎桁行9尺、梁行7.7尺、廂の出9尺である。南北妻中央柱は未検出。柱掘形は方40cm前後で、一部に径15cmの柱根が残る。

G期 発掘区全域にわたって多くの土塙が掘られ、奈良~平安時代の遺構が破壊された時期。131基の土塙がある。鎌倉以降の瓦器・土師器がSK2725・2726・2730・2732・2764・2856・2861から出土している。

III 遺 物

1. 土 器

調査区全域から、多量の奈良時代の土師器・須恵器が出土した。平安時代の土器は、3次東と2次の調査で比較的多く出土している。他に13世紀以降の瓦器・土師器が3次西と2次調査で少量出土した。奈良時代の土器はSK2270とSK2800で多く出土し、平安時代の土器はSD2690及びSK2680で多く出土している。包含層出土の土器は施釉陶器類に限り、以下では遺構出土の土器について説明する。なお、土器の器種名・製作技法の分類と呼称については『平城宮発掘調査報告』に従う。

1次出土土器 (PL. 8・9、fig. 9~11)

SK2270出土土器 SK2270は土層からは上層・下層に分離できるが、遺物の上からは明瞭な差はなく、一括して扱う。

土師器 杯A・杯B・杯C・皿A・椀C・鉢A・壺A・甕Aがある。杯A II(1・2)は、底部外面調整法に2手法ある。1は底部外面をとくに調整せず、口縁部外面をヘラ磨きするa₁手法。2は底部外面をヘラ削り、口縁部外面をヘラ磨きするb₁手法。ともに内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。1・2は平城宮I群土器。杯A III(3)はb₁手法。内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文をもつ。平城宮II群土器。杯B(9)は口径22.5cmの大形の器形。底部は現存しないが、口縁部外面下半をヘラ削り後、ヘラ磨きする。内面にラセン暗文・二段放射暗文をもつ。I群土器。杯C II(8)は、小さな丸底と斜め上にひらく口縁部からなる。底部外面を不調整で、ヘラ磨きのないa₀手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。II群土器。皿A I(6)はa₀手法で底部外面に木葉压痕を残す。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A II(4・5)は、a₁手法(4)とa₀手法(5)とがある。ともに内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。4・5はII群土器。皿A III(7)はa₀手法。内面の暗文はない。II群土器。鉢A I(11)は底部から口縁端部に至る外面全体にヘラ削りをおこない、口縁部外面にヘラ磨きを行なうC₁手法。内面に二段放射暗文をもつが、ラセン暗文の存否は不明。II群土器。鉢A III(10)はC₁手法。内面の暗文はない。II群土器。甕A III(12・13)は体部外面を継ハケメで調整した後、頸部と口縁部の外面をヨコナデして仕上げる。

須恵器 杯A・杯B・皿A・鉢A・盤A・壺B・甕A・甕Dがある。杯A II(22)は底部外面と口縁部下半をヘラ削りし、口縁部内外面に火襷がある。杯A IV(14)は底部外面ヘラキリのままで不調整。杯B I(17)は口径26.3cmの大形の器形。底部外面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。口縁部外面に墨書きがあるが、文字不明。杯B II(19・20)は器高7.65cmの杯(20)と器高6.2cmの杯(19)とがある。図示していないが、20は底部外面をヘラ削

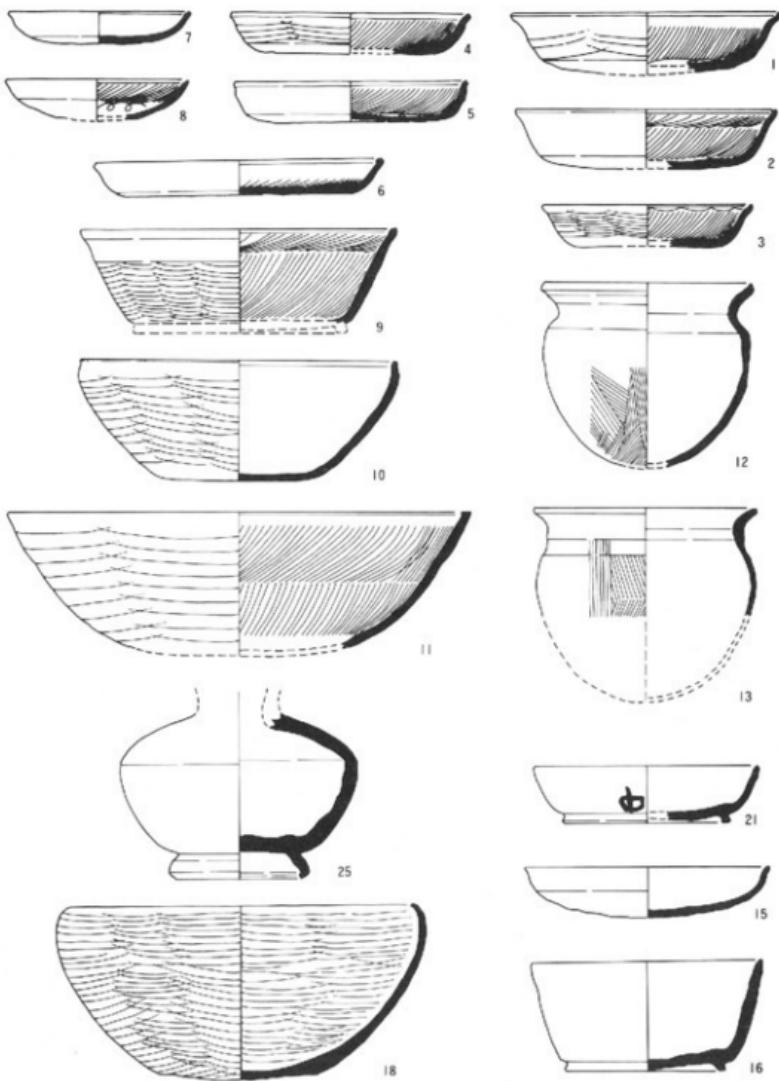


fig. 9 SK2270出土土器実測図(1) 比尺 $\frac{1}{4}$

りする。底部外面を硯として使用した転用硯。19は底部外面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯B III(16・21)は器高7.8cmの杯(16)と器高4.1cmの杯(21)がある。16・21とも底部外面をヘラキリ後、ナデで仕上げる。16の底部外面には漆が付着する。21の口縁部外面下半には「中」の墨書きがある。皿A(15)は底部外面を不調整で、木葉圧痕を残し、口縁部外面をヨコナデして仕上げる。内面に暗文なく、外面にヘラ磨きは施さないが、土師器の手法をとるもの。鉢A(18)は丸底と内側する口縁部からなる半球形の器で、いわゆる鉄鉢。口縁部の外面に横位のヘラ磨きをおこなう。盤A(26)は底部外面が平坦面をなし、底部と口縁部との境が稜角をなして強く外反する口縁をつける浅い器。一对の三角形曲折把手をつける。口縁部外面上半から内面にかけてはロクロナデによって調整し、口縁部下半から底部周縁にかけてはロクロ削りをおこない、底部中央はナナメ方向のケズリによって仕上げる。壺B(25)は長頸壺の体部のみ残存。高台端部は内傾する。体部外面の肩部以下に、平行叩き目を施し、ヘラ削り後、ナデで仕上げる。底部外面はナデで仕上げる。内面に漆が付着し、漆の容器として使用。甕A(23)は卵形の体部に外反する口縁部をつけたもの。体部外面は平行叩き目を施し、体部外面上半は平行叩き目をカキ目で消す。内面は中央に十字形の刻みある同心円文のあて板痕跡をとどめる。甕D(24)は広口に開く口縁部と器高の低い体部からなり、高台を有する。頸部に半環状の四耳をつける。体部外面に平行叩き目、内面に同心円文を残すが、ロクロナデにより消された部分が多い。

S K2286出土土器 土師器杯A・皿A・須恵器杯B・蓋A・椀Aがある。

土師器 杯A II(29・30)には、器高が4.2cm(29)と3.5cm(30)とがある。29はa₀手法でI群土器、30はC₀手法でII群土器。皿A II(31)はC₀手法でII群土器。皿A III(32)は、外面をC₀手法で調整し、内面もヘラケズリする特異なもの。II群土器。椀A(34)はC₁手法。

須恵器 蓋A(33)は頂部上面をロクロナデで仕上げる。口縁端部の断面はS字形に屈曲。

S K2285出土土器 土師器皿A・椀A・須恵器杯B・高杯・壺・盤がある。

土師器 皿A II(35)、皿A III(36)、椀A(37)ともにC₀手法。

須恵器 高杯(38)は杯部のみを残す。杯部外面下半をヘラケズリ後、口縁部内面と杯部外面をロクロヘラケズリして仕上げる。杯部内面はヨコナデ調整後に、格子状にハケメを施す。

S B2263出土土器 土師器皿A II(39)が柱掘形から、椀A(40)と壺B(41)が抜取穴から出土した。

皿A II(39)はa₀手法でI群土器。椀A(40)はC₀手法で、外面全体にヘラ磨きをおこなう。

壺B(41)は上端がやややすぼまる扁平な器体に、強く外反する口縁部をつけた広口の壺。内外面ともにナナメ方向のハケメを施し、口縁部外面をヨコナデによって仕上げる。I群土器

S D2281出土土器 土師器杯A・皿A・蓋A・椀A・高杯・須恵器杯B・蓋が出土した。

土師器 杯A II(42)はC₀手法でII群土器。皿A II(45)はC₀手法でII群土器。皿A III(46)は



fig. 10 SK2270出土土器実測図(2) 縦尺1/4

C_o手法でII群土器。椀A(43・44)はC_o手法でII群土器。蓋A(47)は断面形が笠形を呈する。外面をヘラ磨きする。

S K2287出土土器 土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯A・蓋A・高杯・壺・甕がある。
須恵器 高杯(49)はラッパ状に開く脚部をもつ。脚部外面をロクロヨコナデにより仕上げる。

S K2286出土土器 土師器高杯が3個体出土。

いずれも脚部のみの破片で、円筒接合のa手法が1点(51)、芯棒接合のb手法(50)が2点ある。

3 次東出土土器 (PL.10, fig.12)

S D2690出土土器 土師器杯A・杯B・皿A・須恵器皿A・搗鉢、灰釉陶器皿B・皿E・綠釉陶器杯Bがある。

土師器 杯A(54)は高さ3.9cmと器高が高い。C手法による。杯B(55)は口縁が広く開き、底部に低い高台のつく器形だが、高台部が剥落している。C手法で調整。杯内面に漆が付着しており、漆の容器として使用。皿A(57)はC手法。

須恵器 皿A(59)は口径11.8cmの小型の器形。底部外面をヘラキリのまま不調整。内面と口縁部外面をロクロヨコナデにより仕上げる。搗鉢(60)は底部と体部の一部をとどめる。外面をロクロヨコナデにより仕上げる。

灰釉陶器 皿B(66・67)は扁平な体部に高台のつく器形。66の高台は断面が分厚く低い。67の高台は三角形を呈し薄く高い。2点ともロクロナデが口縁部外面の全体におよび、内面の全面に灰緑色釉を厚くかける。皿E(64)は皿の口縁を折り曲げて耳皿としたもの。器の内外をロクロナデとし、高台はつけない。底部に明瞭な糸切痕を残す。

綠釉陶器 杯B(65)は底部外面をやや凹面をなす円板状に削り出したもので切り高台。全面に暗緑色の釉をかける。硬陶。

S K2680出土土器 土師器皿A・灰釉陶器杯Bがある。

土師器 皿A(56)はC手法。

灰釉陶器 杯B(61・62・63)はやや内凹する体部に高台のつく器形。いずれもロクロナデが口縁部外面の全体におよんでいる。61は内面の全面に灰色釉を薄くかける。62は内面に灰緑色の釉を厚くかけ、外側の口縁部上半に灰緑色の釉を薄くかける。63は内面の全面に灰緑色の釉を厚くかけ、底部外面に「ニ」の墨書きがある。

S B2630出土土器 土師器椀C・壺B・須恵器杯B蓋・壺A蓋がある。

土師器 椭C(69)は内面全面と口縁部上端の外面をヨコナデし、以下を不調整のままにし、底部外面に木葉压痕をとどめないc手法。壺B(70)は外面に横位のヘラ磨きをおこなう。

須恵器 杯B皿蓋(71)は頂部がまるく笠形を呈する。頂部外面をヘラケズリし、ロクロナデで仕上げる。壺A蓋(72)は頂部から垂直におれる縁部をもつ。縁部内端を下方に突出さ

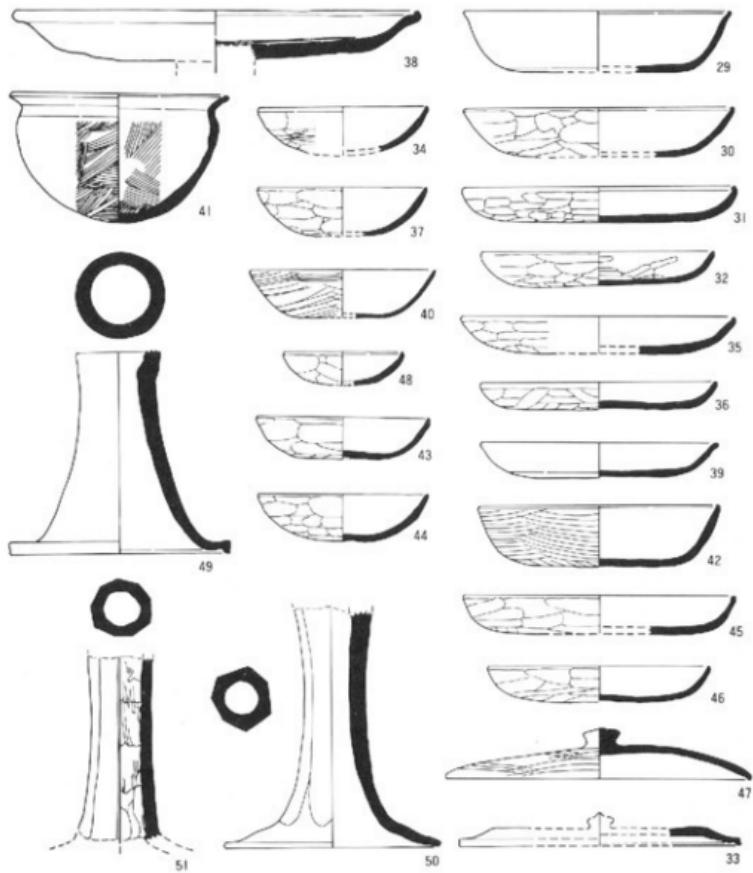


fig. 11 第1次調査出土土器実測図
縮尺1/4

せて外側に段をつくる。

S B2631出土土器 土師器皿A・蓋Aが出土。

皿A(74)はC手法。蓋A(73)は断面形が笠形を呈する蓋。外面全体にヘラケズリを行なう。

S B2640・S B2670・S B2655出土土器

土師器皿A(75)はS B2640出土。e手法による。口縁部上半が強いヨコナデにより屈曲する。縁稲陶器杯B(76)はS B2670出土。口縁と底部との間がやや屈曲する。高台は円形の抉りの部分が広く、高台の断面が円形を呈する。黒色土器杯B(77)はS B2655出土。土

S K2286(29~34)・S K2285(35~37)・S B2263(39~41)
S D2281(42~47)・S K2287(49)・S K2286(50・51)

器の内面が黒色化する黒色土器A。外面上部にヨコナデを施し、それ以下は調整をおこなわない。口縁部内面は水平方向に丁寧なヘラ磨きをおこなう。

S K2643出土土器 土師器皿A・須恵器壺Hが出土。

土師器皿A(78)はC手法。須恵器壺H(79)は口縁端部が屈曲する。口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。

S K2666出土土器 須恵器杯A・杯B・椀・皿Aがある。

皿A(80)は底部外面をヘラケズリし、口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。

包含層出土土器

灰釉陶器小形横瓶(68)は体部上半と口頭部に釉が付着。自然釉の可能性もあるが、ここでは灰釉陶器とする。横幅6.7cm、高さ4.7cmの小型品。体部両端をしばり、両端外面を削って尖らせ、中心に円孔を切り、口頭部をつける。灰釉陶器杯B(81)はロクロナデが口縁の内面と外面の全体におよぶ。内面の全面に灰緑色の釉を施す。

綠釉陶器(82~84)は、高台の底部外面を四面をなす円板状に削り出した後、ロクロヘラケズリによって調整する。84では、底部外面をさらにヨコナデする。82の素地は暗灰色硬陶で、全面に濃緑色の釉を施す。83は口縁部外面をヘラケズリ後、ロクロナデで調整。素地は灰白色軟質で緑色の釉を施す。84はロクロナデが口縁の内面と外面の全体におよぶ。素地は灰色硬陶で、淡緑色の釉を全面に施す。

2次出土土器 (PL.10, fig.13)

S K2371出土土器 土師器杯C・小型壺・須恵器蓋A・鉢A・壺Bがある。

土師器 杯C II(85)は口縁部外面上半にヨコナデ、底部に指圧痕が残るが、保存が悪く、暗文及びヘラ磨きの有無は不明。小型壺(99)は広口で丸底につくる小型の器である。

内外面ともナデによって仕上げる。底部内外面に指による押圧の痕跡がある。器外面には煤が付着する。

須恵器 蓋A III(86)は頂部上面をヘラ削り後、ロクロナデで仕上げる。内面も一部ヘラケズリをおこない、ロクロナデで仕上げる。鉢A(87・88)は内側する口縁部をもつ半球形の器。87・88とも内面はロクロナデ。87は外面下半にロクロ削りをおこない、外面全体にロクロナデを施す。88の外面には横位のヘラ磨きを施す。壺B(89)は長頸壺の肩部以下をとどめる。平底で高台をつけ、高台は外傾する。底部外面にロクロケズリを行ない、底部内面には同じ凹叩き目を残す。

S K2379出土土器 土師器杯A・杯B・皿A・蓋A・須恵器壺E・鉢D・綠釉陶器杯Bがある。

土師器 杯A(95・97)は外面全体にヘラ削りを行なうC手法のもの(95)と、底部外面不調整で指による凹凸の痕を残すc手法のもの(97)がある。杯B(93)はC手法。口縁部は内側し、外面のヘラ削りが口縁上部の屈曲部分におよんでいない。蓋A(91・92)には、頂部が

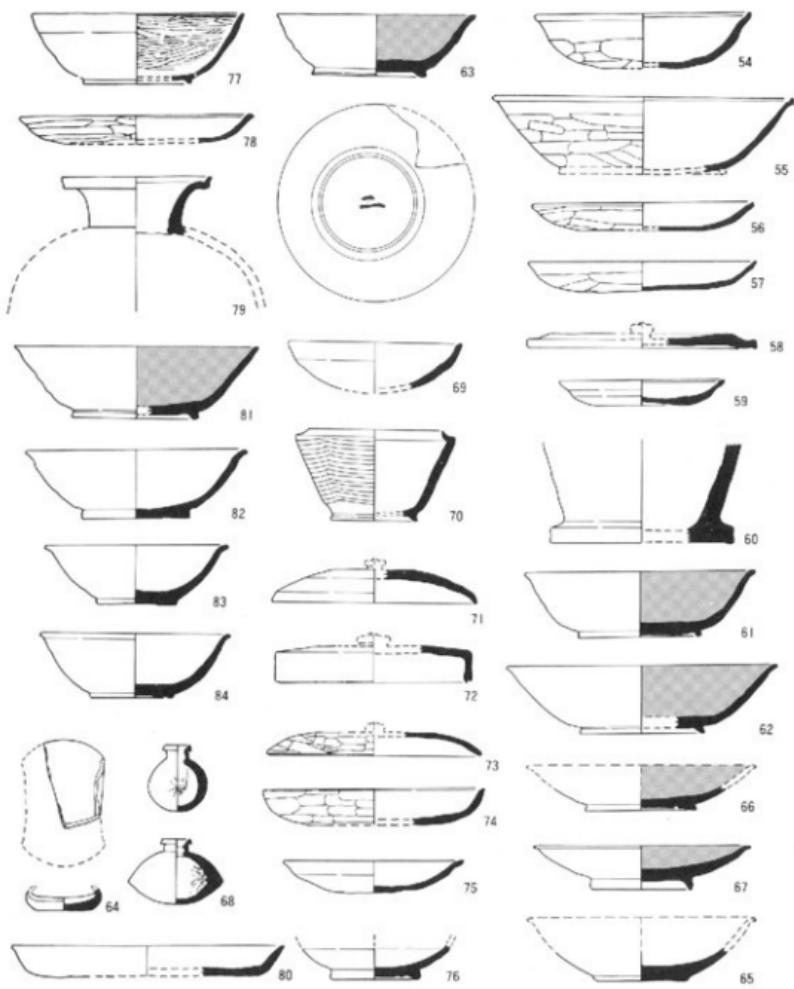


fig. 12 第3次東調査出土土器実測図 比尺1/2

S D2690(54・55・57~60・64~65)・S K2680(56・61~63)

S B2630(69~72)・S B2631(73・74)・S B2640(75)

S B2670(76)・S B2655(77)・S K2643(78・79)

S K2666(80)・包含層(68・81・82~84)

平抑面をなすもの(91)と断面形が等形を呈する蓋(92)とがある。外面全体にヘラケズリを行なう。

須恵器 盔E(98)は平底のイチヂク形の体部に外反する口頭部をつけるもの。底部外面に糸切痕を残す。鉢D(99)は外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなるもの。内・外面をロクロナデで仕上げる。

縁釉陶器 杯B(100)は切り高台の中央を円形に抉った蛇の目高台。軟陶。

S K 2376・S K 2382・S K 2377出土土器

S K 2376出土灰釉陶器皿E(101)は皿の口縁を折り曲げて耳皿としたもの。器の内外をロクロナデとし、はりつけ高台。内面全面に灰緑色の釉を厚くかける。

S K 2382出土土師器皿A(102)はC手法。黒色土器裏(103)は外反する口縁部のみ残存する。黒色土器A。口縁部内外面にヨコナデをおこなう。

S K 2377出土土師器皿(104)はe手法。口縁部外面上半を強くヨコナデし、口縁部外面下半との間に明瞭な稜線が残る。

包含層出土土器

灰釉陶器皿B(105)は扁平な体部に高台のつく器形。ロクロナデが口縁部外面の全体によよぶ。内面の全面に灰緑色釉を厚くかける。

3次西出土土器 (PL.10・11, fig.14・15)

S K 2800出土土器 土師器杯A・皿A・蓋A、須恵器杯A・杯B・鉢E・蓋A・蓋B・羽翼・鏡Dがある。

土師器 杯A II(106~108)はいずれも保存が悪く、ヘラ磨きは108のみ観察できる。106・107のヘラ磨きは復原。106は内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文をもつ。107・108はラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A I(111)はa₉手法。口縁端部が巻き込む。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A II(109・110)は暗文のあるもの(109)とないもの(110)がある。109はb₂手法で内面に放射暗文をもつが、ラセン暗文の存否は不明。110はa₃又はb₃手法で、底部外面に一方向の入念なヘラ磨きを施す。蓋A I(112)は外面を横方向のヘラ磨きの後、頂部ではつまみを狭んで井桁状にヘラ磨きをおこなう。内面にラセン暗文をもつ。106・110~112はII群土器、107~109はI群土器。

須恵器 杯A IV(113)は口径8.9cmの小型の器形。底部外面はヘラキリのまで不調整。

杯B III(114)は底部外面をヘラキリのまで不調整。椀B(115)は器高10.25cmの深い器形。口縁部内・外面をロクロナデで仕上げる。鉢E(116)は平底で、長い口縁部が真直ぐ外方に開くバケツ状の器。口縁部内・外面をロクロナデで仕上げる。蓋B(117)は復原径33.6cmの大型の器形。頂部は等形をなす。頂部外面をロクロ削り、縁部内外面をロクロナデで調整。頂部下面が磨耗して墨が付着しており「杯蓋硯」として使用。蓋A I(118・121・122)は頂部が平坦。118は外面をロクロ削り後、ロクロナデで調整、122は外面全体に自然釉付着。

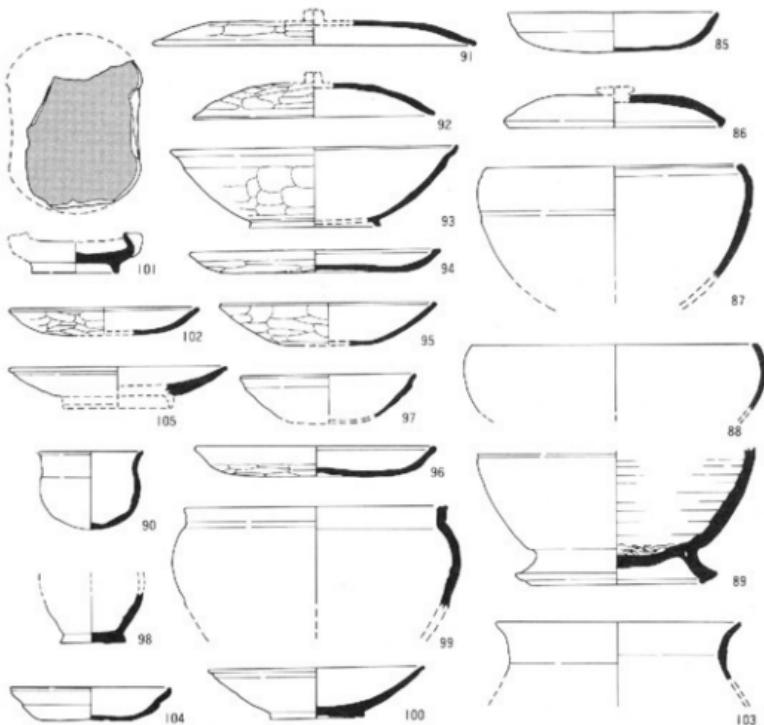


fig. 13 第2次調査出土土器実測図 縮尺1/4

S E2371(85~89)・S K2379(90~100)・S K2376(101)
S K2382(102・103)・S K2377(104)・包含層(105)

121は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。蓋A III(119・120)は頂部が笠形をなすもの(119)と平坦なもの(120)とがある。119は内・外面をロクロナデで仕上げる。120は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。羽甕(123)は甕体部中央に鉤をつける。須恵器としては稀有の例。口縁部を短く直立させ、広口に開く器高の低い体部からなる。体部外面に平行叩き目を残す。体部内・外面を強いヨコナデによって調整し、内面には同心円文を全くとどめない。口縁部外面と体部最上部以外は、窯焼成時の灰をかぶっており、蓋とともに焼成されたことがわかる。甕D(124)は広口に開く口縁部と器高の低い体部からなるもの。体部外面下半は平行叩き目文をそのまま残し、体部外面上半はカキ目によって平行叩き目を消す。内面には同心円文を残すが、部分的にヨコナデによって消されている。

S D2740出土土器 土師器杯A・皿A、須恵器蓋A・B・C・高杯・鉢Aがある。

土師器 杯A IV(125)はa₁手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。底部には成形時の凹凸をとどめ、小枝状の圧痕を残す。内・外面に漆が付着する。I群土器。皿A II(126)はa₃手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。I群土器

須恵器 蓋A III(128)は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。蓋A IV(127)は外面向へラケズリ後、ロクロナデで調整。焼成前に径7mmの円孔を1個穿つ。蓋B(129)は復原径30cmの大型の器形。器の内外面にロクロナデを施し、頂部外面にヘラ磨きを施す。蓋C I(130)は平坦な頂部に垂直で深い縁部をつけるもの。縁端部の内側が上る。頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内・外をロクロナデする。鉢A(131)は丸底と内側する口縁部からなる。外面向ロクロヘラケズリを行ない、内外面にロクロナデを施す。

S D2750出土土器 土師器杯B・高杯・甕、須恵器杯A II・蓋A・壺B・甕が出土。

須恵器 杯A II(134)は底部外面をヘラ切り後、ナデで仕上げる。蓋A II(133)は頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内外をロクロナデする。壺B(135)は長颈壺で、細長い口頭部のみ残存。口頭部を2段構成で体部に接合。口頭部内外面をロクロナデで調整。

S K2801出土土器 須恵器杯A IIIが出土。

須恵器 杯A III(136)は底部外面をヘラ切りのまま不調整。

S B2363出土土器 須恵器杯A・蓋Aが柱抜取穴から出土。

杯A IV(137)は底部外面をヘラケズリで調整。蓋A III(138・139)は頂部が笠形のもの(139)と、平坦なもの(138)とがある。頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内外をロクロナデする。

S K2810出土土器 須恵器壺Cが出土。

須恵器 壺C(140)は肩部が張り稜角をなす低い体部に、外反する広口の口頭部と外傾する高台をつける。体部内・外面をロクロナデで仕上げる。

S K2870出土土器 土師器杯A・蓋・高杯・甕、須恵器皿A・蓋A・鉢A・甕がある。

須恵器 皿A II(143)は底部外面をヘラケズリ後、ナデで調整し、口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。蓋A I(142)は頂部をヘラケズリ後、ロクロナデで仕上げる。蓋A II(141)は頂部をロクロ磨きで仕上げる。

S D2812出土土器 土師器皿A・椀A・壺B・須恵器壺E・托が出土。

土師器 皿A I(146)はb₀手法。皿A II(147)はC₀手法。椀A(148)はC₀手法。壺B(145)は短く外反する口縁部をつけた広口壺。体部上面にヘラ磨きをほどこす。

須恵器 壺E(144)は斜め上に開く胸部と短い口縁部を付した広口壺。口縁部・体部内外面をロクロナデで仕上げる。托(149)は、受台と高台部を欠損する。内・外面をロクロナデで仕上げる。

S K2861・S K2764・S K2720・S K2732・S K2726出土土器

S K2861から瓦器椀、土師器皿が出土。瓦器碗(150)は口縁部上半のみの破片。口縁部上半に強いヨコナデ調整を施す。ミガキ調整は外面向では口縁部下1cmについて横方向に粗く

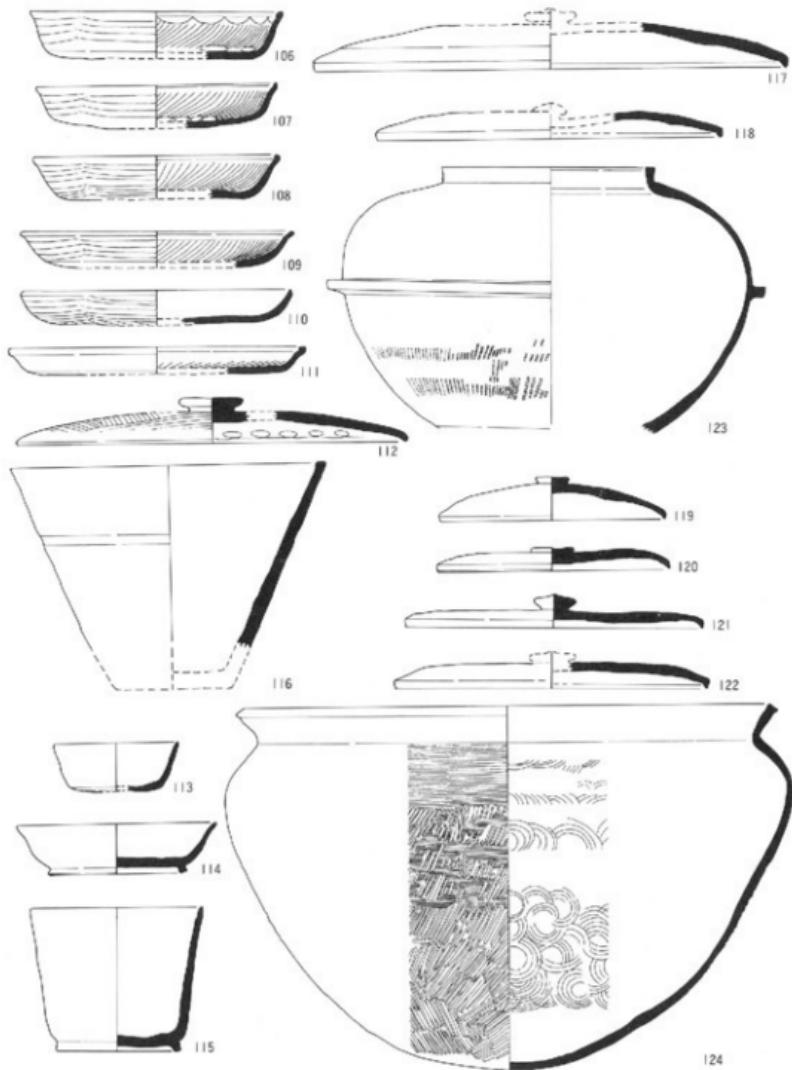


fig. 14 S K2800出土土器実測図 縮尺1/2

施し、内面には連続圓線を施す。土師器皿(151・152)は、底部外面を未調整で、口縁部外面を強くヨコナデして仕上げる。151は口縁部外面に糸切痕を残す。S K2764から瓦器椀が出土。瓦器碗(153)は底部に断面三角形をした低い高台をはりつけ、口縁部上半に強いヨコナデを施す。ミガキ調整は、外面では口縁端部下1cmについて横及び斜め方向に粗く施し、内面には連続圓線を施す。S K2720から瓦器小皿が出土。瓦器小皿(154)は外反する口縁部をもち、内底面にはシグザグ状のミガキ調整を施す。S K2732から土師器小皿が出土。土師器小皿(155)は、口径9cm、器高1.3cmの浅い皿。口縁部にヨコナデ調整を施す。S K2726から土師器小皿が出土。土師器小皿(156)は、口縁部は肥厚し、底部はあげ底氣味の形態をなす。口縁部上半に強い横ナデ調整を施す。

包含層出土土器

灰釉陶器 壺(158)は、体部上半の破片。内外面をロクロナデで調整。外面に緑灰色の釉を施す。

磁器 香炉蓋(159)は口縁部の破片。口唇部は身との接合を良くするため平坦に成形する。口縁部下半は幅広い3条の沈線をほどこし、上半部には透しを入れる。透しの形は不明。全面に灰緑色の釉がムラなく掛けられ、胎上は灰色で精製されている。

土器の年代

平城宮出土土器の編年と年代は『平城宮発掘調査報告』で明らかにしているが、それに従って、本調査区出土の土器を編年すると次のようになる。S K2270・S K2800・S E2371出土土器は平城宮IIに相当する。S K2270土師器の杯は螺旋暗文+1段放射暗文+速弧暗文が一般化し、須恵器の鉢Bを丸底につくる。S K2800では土師器の暗文と共に、須恵器杯B蓋に平城宮III以降顕著になる口縁部の屈曲がみられない。S E2371では須恵器壺Bが出土している。S B2363出土土器は平城宮II～IIIに相当する。須恵器杯B蓋の口縁部に屈曲があらわれるが、屈曲は顕著ではなく、ほとんど屈曲のみられないものが主流である。S D2281出土土器は平城宮Vに相当する。土師器杯・皿・椀はC手法で調整し、椀の外面に密なミガキ調整がみられる。S K2286・S B2263出土土器は平城宮VI（長岡宮併行）に相当する。土師器杯・皿の法量及び椀のミガキ調整は、延暦年間の木簡を出土した長岡京 S D1301出土土器に相当する。S B2631出土土器は平城宮VIIに相当する。S B2631出土土器の皿Aは器高が2.6cmで、S D650 Aよりは平城宮VIIのS B2631に近い。S D2690及びS K2379出土土器は平城京東三坊大路東側溝下層 S D650 A出土土器に相当する。土師器杯及び皿において、C手法が顕著なことと、灰釉陶器の杯・皿において内面全面のみ釉をかけることから、S D650 A出土土器に相当する。

1 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1978年3月

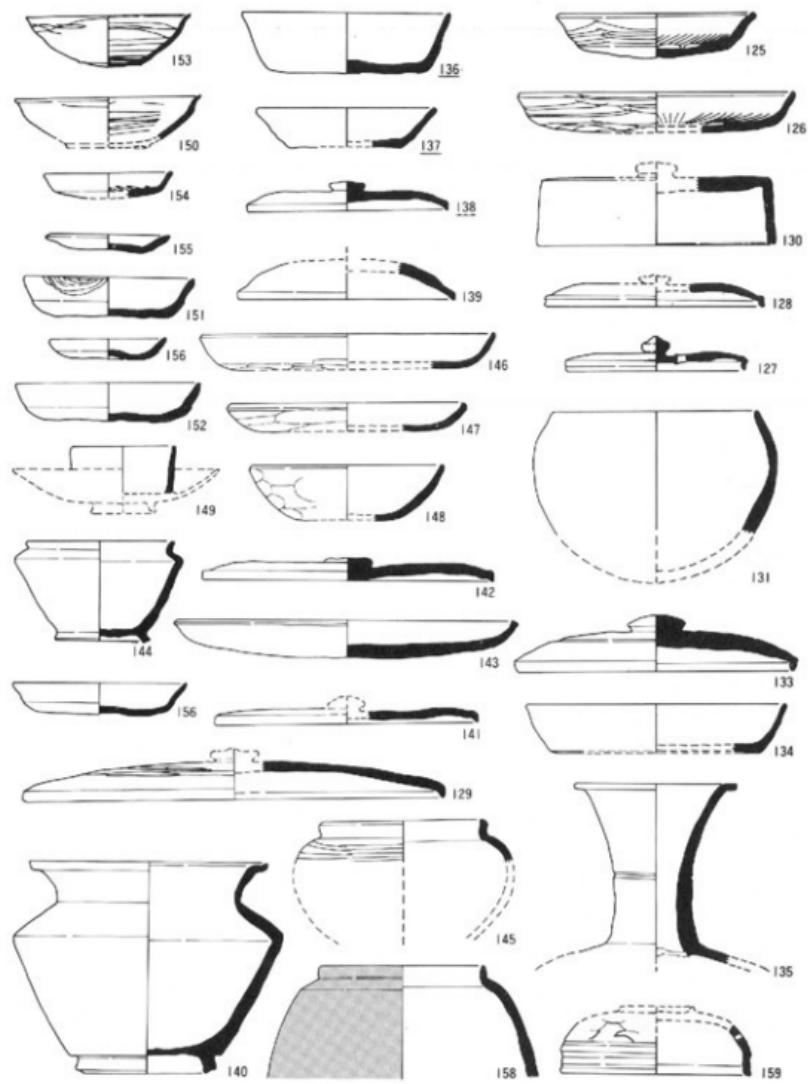


fig. 15 第3次西調査出土土器実測図 輪尺図

S D2740(125~131)・S D2750(133~135)・S K2801(136)

S B2363(137~139)・S K2810(140)・S K2870(141~143)

S D2812(144~149)・S K2861(150~152)・S K2764(153)

S K2720(154)・S K2732(155)・S K2726(156)・包含層(158~159)

2 瓦 塼 類

4 調査区から出土した瓦塼類は整理箱190杯分ある。内訳は軒瓦127点、施釉平瓦2点、質斗瓦1点、塼20点のほかは丸・半瓦である。量は軒瓦・丸半瓦とともに3次西調査区が多く、同東調査区がこれに次ぎ、他調査区は少ない。ちなみに1aあたりの軒瓦の出土点数を調べると、3次西調査区が11点、同東調査区が3点である。他の平城京内遺跡での1aあたりの出土点数は、左京三条一坊十四坪が4点、左京一条三坊十五・十六坪が3点、左京三条二坊六坪が2点、左京三条二坊十・十五坪が1点となり、3次西調査区は京としては瓦の出土量がきわめて多いことがわかる。平城宮内では1aあたり10点を越えることが多いが、これとほぼ匹敵する。しかし3次西調査区でも西半部すなわち左京二条二坊十三坪と十二坪との坪境小路付近がもっとも多いので、二次的な瓦の移動を考えると、多くの瓦類を使用していたのが十二坪内であるか十三坪内であるか確定的ではない。

A. 軒丸瓦 (P.L.12~13, fig.16・17^{図1})

16型式28種78点出土した。新出の型式が5種ある。

6131A 6131は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁が細長く先端が丸い。中房は小さく弁区より一段突出する。外区外縁と内縁を画する界線がなく、内縁に珠文、外縁に凸鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点出土した。Aには間弁がある。右京二条二坊十六坪・法華寺旧境内・法華寺阿弥陀浄土院に同范例がある。

6132A 6132は単弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文・外縁に凹線鋸歯文をめぐらす。中房が弁区より一段低い。A種のみがあり1点出土した。法華寺旧境内に同范例がある。

6133Aa・Db 6133は菊華状の単弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文をめぐらし外縁が素文である。A~D・I~Pの12種がありAaが1点、Dbが1点出土した。Aは弁端が尖り、弁数・珠文数が6133中最少である。蓮弁の輪郭線と予葉を一部彫り直したAbがある。Dは弁端が丸く、外区内縁と外縁を画す界線がない。蓮子の配置が均整でないのが特徴。中房が弁区と同一平面上にあるDaと一段突出させたDbがある。

6138A・B・I・J 6138は単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁が短かく先端が丸い。間弁が三角形を呈し外区内縁に珠文をめぐらす。A~C・E~Jの9種があり、Aが1点、Bが1点、Iが2点、Jが2点、種別不明品が4点出土した。I・Jは新型式である。A・Iは蓮子が1+5で外区外縁が素文。Aは間弁が三角形で、Iは「人」字形に近い。Bは蓮子が1+5、外区外縁が線鋸歯文で弁端が丸い。Jは蓮子が1+6、外区外縁が素文で弁どうしが離れる。Fに似るが弁端が狭く蓮子の間隔が狭い点で区別できる。I・Jともに瓦当裏面は平坦でヘラケズリを施し、丸瓦の接合位置が低く接合線が浅い円弧を描く。Aが左京三条二坊六坪、Bが左京一条三坊十五・十六坪、同八条三坊九坪、東三坊大路・西一坊間大路西側溝、Iが左京二条二坊十二坪で出土しているほか、法華寺旧境内でB・

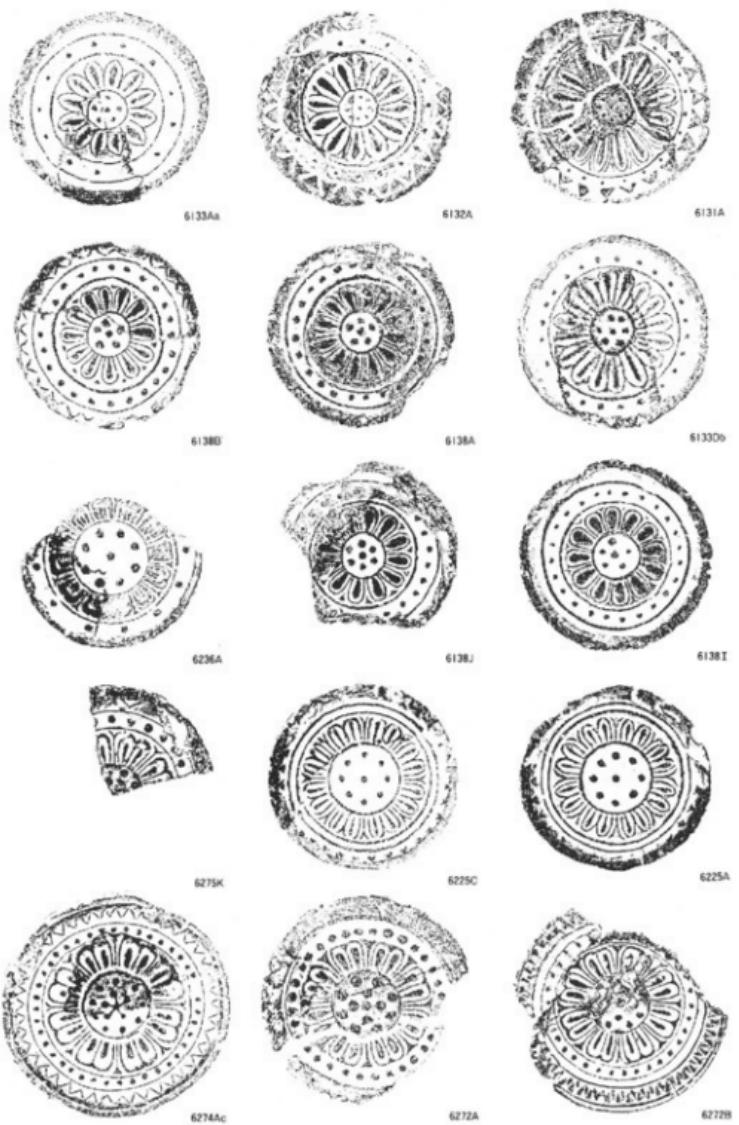


fig. 16 軒丸瓦拓本 比尺½

Iが、法華寺阿弥陀淨土院でB・I・Jが出土している。

6225A・C 6225は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に二重圓線、外縁に凸線鋸歯文を置く。A～E・Lの6種がありAが3点、Cが2点出土した。Aは弁端が尖りCは丸い。

6236A 6236は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房が大きく、蓮弁の2つの子葉が接し、弁の輪郭線が幅広い。外区内縁に珠文をめぐらし外縁が篆文。A・D～Fの4種がありAが1点出土した。Aは弁数が多く弁幅が狭い。左京二条二坊十二坪、西大寺に同範例がある。

6272A・B 6272は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に $1+4+8$ の蓮子を置き、外区内縁に珠文、内縁より一段高い外縁に面違い鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点、Bが5点、種別不明品が1点出土した。AはBより中房が突出し、珠文と外区外縁の間隔が狭く、外区外縁の傾斜が急である。Aが左京二条二坊十二坪、Bが左京二条五坊北郊、同三條二坊六・七・九坪で出土し、右京九条一坊十二坪・九条大路では両種が出土。

6274A 6274は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で藤原宮式の一種。外区内縁に珠文、外縁に細かい線鋸歯文を置き、蓮子の配置が $1+5+9$ 。蓮弁の反転が強いのが特徴。A・Bの2種がありAcが1点出土した。Aは中房が突出し蓮弁の反転がBより強い。Ab・Acがあり、Abは笠が磨耗し蓮子を囲む圓線が消滅した段階で、蓮子や外区内縁・外縁間の界線を彫り直す。Acは中房中央の蓮子と一重めの蓮子とを線で結ぶ。今回の出土品はAc。

6275K 6275は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で藤原宮式の一種。外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらし、蓮子は中央の1個の周囲に2重にめぐらす。A～E・G～K・Mの11種がありKが1点出土した。Kは新型式で、外区内縁の珠文の間隔が広い点が特徴的。瓦当裏面は平坦で、丸瓦の接合位置はやや低く、接合線は円弧を描く。

6282Bb・Db 6282は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁を輪郭線で平板に表現し、間弁が互いに連なり界線状にめぐる。A・B・D～I・Lの9種があり、Aを除き中房中央の蓮子が大きく、外区内・外縁の界線が太いのが特徴。Bbが3点、Dbが1点出土した。Bは蓮弁が短かくDは小型品。ともに子葉が間弁とくっつかないaとくっつくbがある。

6291A 6291は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁の形状が後述の6308と似るが、間弁が互いに連なり蓮弁の輪郭線に沿ってめぐる。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点出土した。Aは内区が盛り上り、蓮子の配置が $1+6$ 。

6308A・I 6308は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、間弁が独立し、中房が弁区より突出する。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文を置く。A～D・H～J・L・Nの9種があり、Aが1点、Iが5点出土した。Aは珠文・線鋸歯文が16個。Iは新型式で、珠文が22個、線鋸歯文が16個でDに似るが、Dより中房と弁幅が大きく、蓮子・間弁・珠文の位置関係が異なる。瓦当裏面中央をやや窪ませ粗くナテを施し、縁辺部にヘラケズリを施すのが特徴。丸瓦の接合位置が高く、接合線は深い円弧を描く。左京二条二坊十二坪に同範例がある。^{注2}

6311A・B・F 6311は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、6308に似るが中房が弁区より低いのが特徴。A～Hの8種があり、Aが6点、Bが3点、Fが1点出土した。Fは新型式。A・



6291A



6282Db



6282Bd



6311A



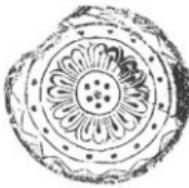
6308I



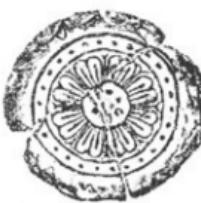
6308A



6316A



6311F



6311B



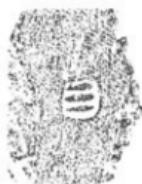
6313G



6313D



6313A



7283A

fig. 17 軒丸瓦拓本(縮尺%)・文字瓦拓本(縮尺%)

Bとともに蓮弁の反転が強いが、Aは弁端が高く反り上り、Bは垂れ下がる。Dは蓮弁の反転が弱く、珠文が16個、線鑄齒文が22個でCに似るが、中房がやや大きく、内区が低く盛り上り、間弁の先端が大きく枝分れする点で異なる。瓦当裏面は平坦でナデを施し、丸瓦の接合位置は低く、接合線は円弧を描く。法華寺旧境内に同范例がある。

6313 Aa・C・G 6313は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦で、蓮子が1個しかない。外区内縁に珠文をめぐらす。A～Gの7種があり、Aaが5点、Cが6点、Gが1点出土した。Aは蓮弁の反転が強い。筋を彫り直し内区全体を盛り上らせたAbがある。CはAより一回り小さく蓮弁の反転が弱い。Gは新型式。外区外縁が素文で、内区が高く盛り上る。瓦当裏面は平坦でヘラケズリを施し、丸瓦の接合位置が高く接合線は深い円弧を描く。

6316 A 6316は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、間弁がなく、子葉を画す弁の中心線がない。外区外縁に珠文を置く。A～Kの11種がありAが1点出土した。Aは蓮子の配置が1+7で均整でない。蓮弁が細長く外区外縁に線鑄齒文をめぐらす。東三坊大路に出土例がある。

7283 A 7283は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房が弁区より一段低く、外区外縁が素文の直立縁で内縁に珠文をめぐらす。蓮弁は2本の輪郭線であらわす。瓦当裏面は平坦でナデを施し、丸瓦の接合位置はやや低い。東三坊大路、法華寺旧境内に同范例がある。

B. 軒平瓦 (Pl.14・15, Fig.18)

13型式19種49点出土した。新出の型式が3種ある。

6640 A 6640は扁行唐草文軒平瓦で、唐草の左5単位が左偏行、右4単位が右偏行である。上外区に珠文、脇区・下外区に線鑄齒文を置く。A種のみがあり2点出土した。顎は段顎。左京四条二坊一坪、東三坊大路に同范例がある。

6643 C 6643は左偏行唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。A～Dの5種がありCが3点出土した。Cは珠文がやや大振りで支葉の巻き込みが強い。顎は段顎。

6663 B・C 6663は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、内・外区の界線が二重にめぐる。中心飾が花頭形で基部が界線にとりつく。A～F・H～Nの13種があり、Bが1点、Cが2点出土した。Bは唐草左右第三単位第二支葉の隣りに小珠点を置く。段顎・曲線顎の2者があるが今回の出土品は曲線顎。Cは唐草右第三単位第一支葉を欠く。顎は曲線顎。

6664 F・K 6664は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が花頭形で唐草左右第三単位主葉が界線にとりつく。顎は段顎。A～D、F～Pの15種があり、Fが4点、Kが1点出土した。Fは中心飾の基部が界線にとりつく。Kは中心飾の基部が界線にとりつかず、唐草左右第三単位の大きさが第一・第二単位とほぼ等しい。

6682 B 6682は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が逆「十」字形で、唐草左右第三単位第一支葉が巻き込む。A～Cの3種がありBが1点出土した。Bは新型式で、中心飾が扁平、唐草基部が界線に接さず、唐草左第三単位第一支葉の巻き込みが小さい。顎は段顎。桶巻作りで製作され、平瓦部凸面に横位縄叩き目を残し、

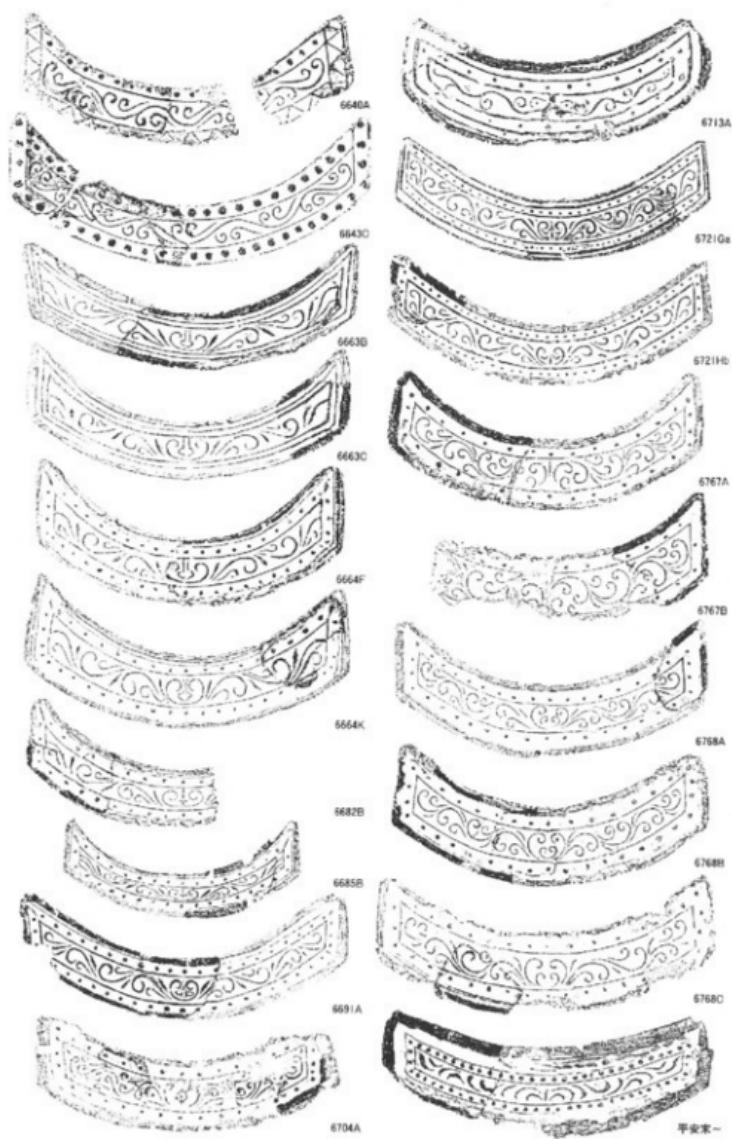


fig. 18 軒平瓦拓本 縱尺½

凹面は横位のナデで布目を消し、瓦当近くに横位のヘラケズリを施す。左京二条二坊十二坪、同三条一坊十四坪、同三条二坊十坪・十五坪に同範例がある。

6685B 6685は6682の小型品で、唐草左右第三単位第一支葉が脇区界線にとりつく。A～Eの5種がありBが3点出土した。Bは瓦当が最小で脇区の珠文が1個。顎は段顎。

6691A 6691は4回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が三葉形を呈する。A～Dの4種がありAが2点出土した。Aは中心飾の基部上端が二又に分れ界線に接しない。唐草が横長で巻きが弱い。顎は曲線顎。

6704A 6704は4回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾が「中」字形。唐草の主葉と支葉の区別が不明瞭で先端が小さく巻き込む。顎は曲線顎。A種のみがあり2点出土した。

6713A 6713は5回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に粗く珠文を置く。中心飾が逆心葉形で、唐草には支葉がない。A種のみがあり7点出土した。顎は曲線顎。一枚作りで製作され、平瓦部凸面は縦位のナデの後に縦位のヘラケズリを施し、凹面は未調整で布目を残すが、瓦当近くと側縁近くにヘラケズリを施す。左京一条三坊十五・十六坪、法華寺旧境内、法華寺阿弥陀浄土院に同範例がある。

6721Ga・Gb・Hb 6721は5回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾が「小」字形ないし逆「小」字形で外区に密に珠文を置く。A・C～Kの10種があり、Ga・Gb・Hbが各1点出土した。Gaは外区の珠文の外側にさらに界線をめぐらすが、Gbはその界線を削り取り直立線にかえる。顎は曲線顎。Hbは内区文様がGに似るが脇区に珠文を置く。脇区の上端に珠文がないHaと珠文を追加するHbがある。顎は直線顎。

6767A・B 6767は3回反転の均整唐草文軒平瓦で外区・脇区に珠文を置く。中心飾は直立する針形を中心にその左右に下から上へ巻き込む支葉を数個配す。各唐草には支葉が3つずつある。顎は曲線顎。A・Bの2種があり、Aが7点、Bが4点出土した。Bは新型式で、Aより唐草が大きく巻き込みも強い。A・Bともに一枚作りで製作され、平瓦部凸面に縦位の縄叩き目を残し、顎部に横位のナデを施す。凹面には布目を残し、瓦当近くに横位のヘラケズリを施す。A・Bともに法華寺・法華寺阿弥陀浄土院に同範例がある。

6768A・B・C 6768は4回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾は花頭を持たず二重の中心葉からなる。顎は曲線顎。A～Dの4種があり、Aが1点、Bが3点、Cが1点出土した。Aは内区幅が狭く唐草の巻きが小さい。Bは新型式で、中心飾の内側の中心葉がくつき、唐草の巻きが大きい。Cも新型式でA・Bより唐草が大振り。3者ともに一枚作りで製作され、平瓦部凸面に縦位縄叩き目を残し、顎部は縦位ナデの後に横位ナデを施す。凹面は布目を残し瓦当近くに横位のヘラケズリを施す。左京二条二坊十四坪でB・C、東三坊大路でA、法華寺・法華寺阿弥陀浄土院でA・Bが出土。

平安時代末以降の軒平瓦 棒状の中心飾をもつ4回反転の均整唐草文軒平瓦が1点ある。外区外縁が直立線で顎は深い段顎である。興福寺食堂の養和再建時（1181）の軒平瓦の文様系譜を引き、法華寺・新薬師寺・安倍寺・東大寺・元興寺に類例がある。

C. その他の瓦博類

丸・平瓦 整理稿183杯分ある。平瓦には1枚作りによるものと桶巻作りによるものがある。ともに凸面に縦位の繩叩き目を残すものが圧倒的に多い。そのほか桶巻作りによるものには以下の4種がある。1. 凸面に横位のハケメを施す。23点あり、うち4点は縦位の繩叩き目が残るが、他は叩き目をハケメで消し去る。2. 凸面に斜格子叩き目を施す。5点あり、うち1点は叩きの後に縦位のヘラケズリを施す。3. 凸面に平行叩き目を施し、凹面は縦位のナデで布目を消す。1点ある。4. 凸面に横位の繩叩き目を施す。3点ある。このうち1・2は厚手で焼成が甘く、3・4は薄手で比較的焼成が良い。また1枚作りによるもので、成形後に縦位のヘラケズリを施すものが3点ある。丸瓦は、凸面に縦位のナデを施し叩き目を消し去るものが多いため、縦位の繩叩き目を施した後に横位のナデを施すものと未調整のものとが少景ある。

施釉平瓦 長さ14cmの破片と5cmの破片が1点ずつ出土した。瓦当の凹面と狹端面に緑釉と黄釉を施す。側縁から2~3cmの範囲には施釉しない。平瓦は厚さ1.3cmと薄手で、凸面に縦位の繩叩き目を残し、凹面はナデする。胎土は精良で淡黄白色を呈し、焼成は甘い。

熨斗瓦 1点出土した。平瓦製作後、生乾きの段階で分割してつくる。幅は10cm、長さは不明である。凸面に縦位の繩叩き目、凹面に布目を残し、側面・端面は平滑にナデする。

文字瓦 3点ある。いずれも刻印を押捺したもので、「ハ」「目」「三」が各1点ある。「ハ」は新種。径1.5cmの円形の刻印で陽刻（瓦面での状態）である。平瓦の凹面の側縁から4.5cm、狹端縁から3.5cmの位置に押す。字の向きは平瓦の長軸に対し斜めで、広端縁側が上である。「目」も新種。長辺1.7cm以上、短辺1.4cm以上の縦長の刻印で陽刻である。丸瓦の玉縁の内面の側縁から3.2cm、端縁から4.1cmの位置に押す。字の向きは丸瓦の長軸に対しほぼ直交する。「三」は一辺1.6cmの隅丸方形の刻印で陽刻である。丸瓦の凹面に押し、字の向きは丸瓦の長軸に平行する。京都府音如ヶ谷瓦窯に出土例がある。

埠 破片が20点ある。3次西調査区西半部に多い。全形を残すものはないが、長辺22.5cm以上、短辺17cm、厚さ7cmの長方埠が1点ある。

D. 遺構に伴って出土した瓦博類

以上A~Cで説明した瓦博類のうち、遺構から出土したおもなものは以下の通りである。後述する遺構の時期区分に従って時期別に示す。A期、SK2270→6313、SD2740→6132 A・6272B・6311A・6664F・熨斗瓦・埠、SD2750→6282B b、SK2800→6272B。C期、SD2281→6308I、SK2287→施釉平瓦、SD2812→6282B・平安時代末以降軒平瓦・施釉平瓦。E期、SK2379→6308I、SB2670→6713A、SK2680→6274A c・6275K・6664K・6713A・7283A・埠、SK2690→6282B・6282D b・6713A、SD2699→6663C。F期土埠→6138A・6225A・6272B・6282B b・6308I・6311A・6313C・6643C・6663C・6691A・文字瓦「目」。

E. 軒瓦の時期と組合せ

今回の調査では、從来時期不明であった軒瓦の年代を確定したり、平城宮出土軒瓦編年^{II4}を改訂したりするための資料は得られなかった。そこで出土した型式の年代を從来の編年に基き示した(tab.4)。組合せは、出土した型式数が多い割には型式毎の点数が少ないため決定しにくい。第Ⅲ期以前については平城宮での組合せを参考に、6311A・B-6664F、6313A・C-6685B、6225A・C-6663B・C、6282B・D-6721G・Hの組合せが考えられる。第Ⅳ期では6138と組むのが6713・6767・6768の中のどれであるかが問題となる。^{II5}いずれも天平宝字年間(757-761)に造営された法華寺阿弥陀淨土院跡で出土する。このうち6713Aは阿弥陀淨土院創建時に軒瓦を供給した京都府音如ヶ谷瓦窯跡では出土しておらず、創建時の軒瓦6714Aの文様系譜を引きながらもかなり退化しているので、時期が下る可能性が大きい。今回の調査でも、6138・6767・6768が3次西調査区西端部のみで出土するのに対し、6713Aは3次東調査区のみで出土することから、6138-6767ないし6768の組み合せが考えられるがこれ以上特定できない。いずれにせよ阿弥陀淨土院での組み合せ6138B-6714Aとは異なる。

F. 当調査区出土軒瓦の様相 (tab.4)

はじめに述べたように、軒瓦の大半が3次西調査区西半部で出土しているため、今回の出土資料を用いて左京二条二坊十三坪での軒瓦の様相を語ることは困難であるが、二三の観點を指摘する。近年の平城京の調査によって、平城宮ではあまり出土せず平城京独特の瓦当文様を有す軒瓦の種類が増加し、宮所用瓦とは別個に生産・使用されたと考えられている。これが官により平城京造営用として作られたのか、貴族の邸宅用が含まれるのか、後者の場合でも供給が官によるのか私的になされたのかの解明が目前の急務である。また、京内でまとまった量の瓦を出土する地域での軒瓦の様相には2類型あることが判明している^{注7}。すなわち類型Iは各時期にわたって平城宮所用瓦の同范品が使用され、平城宮と異なる軒瓦がほとんど出土しない地域、類型IIは平城宮内で未出かあまり出土しない軒瓦が主体を占める地域である。各類型とりわけ後者の性格付けが今後の課題である。

当調査区出土軒瓦は、第Ⅲ期以前は類型Iであるが、6272A・B、6308I、6313G、6682Bは平城宮で未出である。平城京独自の瓦当文様を有す軒瓦の初現は、確実には第Ⅱ期^{II6}であり、神亀元年(724)の邸宅への瓦葺き奨励を反映したものと指摘されている。6308I・6313G・6682Bも第Ⅱ期に属す例としてよからう。しかし、平城京独自の軒瓦の初現が第Ⅱ期に収まるかどうかは検討を要する。たとえば1983年の左京四条二坊一坪の調査では6348A-6675Aの組合せが得られた。両者ともに平城京で多く出土し、文様の特徴は第Ⅰ期に遡る可能性がある。また、6272は1980年の九条大路の調査で右京九条一坊十二坪の南辺築地付近から多く出土し、觀音寺所用瓦の可能性も考えられているが、近年平城京内各所で出土例が増加した。瓦当文様の特徴は藤原宮式に属し、藤原宮所用瓦の再利用かもしれ

左)K 条二坊十三坪(当調査区)		法華寺阿弥陀淨土院跡		京都府首領ヶ谷山跡	
	軒瓦	軒平瓦	軒瓦	軒平瓦	軒瓦
第 708 I 期 721	6272A・B 6271Ae 6275K	6640A 6643C 6664K			
721 II 期 715	6291A 6308A・I 6311A・B・F 6313A・C・G	6664F 6662H 6685B			
745 III 期 759	6225A・C 6133Aa・Db 6282Ab・Db 6316A	6663B・C 6691A 6721Ga・Gb Hb			
	6138A B	6138A B F	6138B F G		
759 IV 期	I J	H I J		6137C	
	6236A	6236D	6714A 6716A 6725A	6714A 6716A	
784	6767A B 6768A B C	6767A B 6768A B 6713A	6767A B 6768A B 6713A	6767A B 6768A B D	
時 期 不 明	6131A 6132A	6131A 6704A 6713A	6296B		

tab. 4 軒瓦の編年および同窓関係

ないが、今の所藤原宮では出土しておらず、平城京独自の軒瓦の候補となる。

第Ⅳ期には、当調査区出土の軒瓦の様相は類型Ⅱへと一変し、しかも軒瓦のほとんどが法華寺阿弥陀淨土院跡出土の軒瓦と同窓関係を有す点が注目に値する。阿弥陀淨土院と密接な関係を有した施設が付近に存在したと考えてよからうが、その場所の確定は左京二条二坊十二坪東半部の調査を待って検討しなければならない。

- 記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。番号のつけ方等詳細については同研究所『基準資料Ⅰ瓦編1』(1973年)の解説を参照されたい。なお、平城宮で未出の型式、および平城宮でほとんど出土せず平城京で出土例のある型式の、京内での出土地を略記しておく。
- 1983年に奈良市教育委員会が調査した。出土瓦整理担当の中井公氏から御教示頂いた。
- 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」研究論集VI。(奈文研1980)。
- 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ瓦編2解説』(奈文研1975)。『平城宮発掘調査報告Ⅱ』(奈文研1982)。
- 『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)』。(奈文研1973)
- 森都大・吉田恵二「平城ニュータウン地域内遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(京都府1974)。
- 『平城京左京三条二坊』(奈文研1975)。
- 『平城京左京三条二坊九坪発掘調査概要報告』『奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和54年度)』(奈良市1980)。
- 『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』(奈文研1983)。
- 『平城京左京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ-』(奈文研1981)。

3 木漆器、金属製品

A 木製品 (PL.16, fig.19)

木製品は大半が小路の東西両側溝 S D2740・2750から出土し、少數が上塙から出土した。その絶対量は多くはなく、祭祀具、紡織具、その他に分けることができる。

祭祀具 舟車と刀形がある。舟車(1)は、板目にとったスギの薄板の一端を半頭状に削ったもので、側面に切りこみはない。下端部が打損し、全長は不明。現存長13cm、幅1.8cm、厚さ0.1cm。西側溝出土。刀形(2)は刀身を模したもの。刀身部は反りをもたせ、切先の一部を両刃風に削るが、刃は作らず、鍔もない。茎との境は片開とする。形を似せるのみで、削りなども離である。ヒノキ。全長26.7cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm。西側溝出土。

紡織具 糸車の枠木(5)がある。ヒノキの角棒を用い、枠木内面の上下二箇所に横木を挿入する枘穴があり、枘穴間の内面を内反りに削りこむ。枘穴の間隔は11.9cm。一方の枘穴以下を欠損するが、復原全長は30cmである。枠木の端部は若干削り細める。幅1.8cm、厚1.1cm。西側溝出土。

その他 車輪の部品(8)は、アカガシ並属の板目材を用いたもので、両面に一定の曲率をもって作る。一端部には出納を作り、他端部は破損しているが、方孔を作る。この方孔は、原形では中央部にあったのであろう。弯曲する外側は磨減痕が著しい。内面は平らに作る。側面は、一方の面のほぼ中央に、長軸に平行する鍔をつけるが、他方は不明確である。現存部全長は10.3cm、最大幅4.7cm、厚さ2.1cm。出納は木口の中央にあり、長さ、幅とも1.3cmで、かなり磨耗している。他端部の方孔は、幅1.7cm。本例に類似した遺品は、平城京左京一条三坊の東三坊大路東側溝 S D650(奈文研『平城宮跡発掘調査報告Ⅵ』奈文研学報第23回)から出土し、車輪の一部とされている。ここでは、本例に類似した部品Aと、一端に入り枘を作る部品Bがある。その復原案では、車輪は内輪と外輪があり、部品Aが内輪に、部品Bが外輪になる。各々の中央部の方孔は車輪の鍔を受ける枘穴となる。ただ、S D650の部品Aは弯曲する外側に磨減痕が見られないこと、内面中央には長軸に平行する鍔を作る点、本例とは異なる。本例は外側が磨滅している点や内面が平らであることを考えると、外輪の可能性もある。フォーク状木器(9)はヒノキの板目板から身と柄を作ったもので、身の先端を二叉とする。先端部は磨耗痕が見られる。柄は身の軸をゆるやかに狭めて作る。一部に割面を残すが、全体的によく削り調整している。柄の先端部を欠損するため、全長は不明。現存長25.5cm、幅4.8cm、厚さ1.4cm。東側溝出土。杓子状木器(10)はヒノキの板目板から柄と身を作る。身の途中から折損するが、現存部からみて、先端部は斜にそぎ落していたようである。身と柄の境は明瞭な肩を作る。両面とも削り面を丹念に削り調整。復原全長39cm、幅5.1cm、厚さ0.7cm。東側溝出土。部材(4)は、全長11.2cm、上幅2.7cm、下幅1.8cmのヒノキの薄板材で、上端から1mのところに長軸に直交する溝を彫りこみ、側邊も浅く削りこむ。

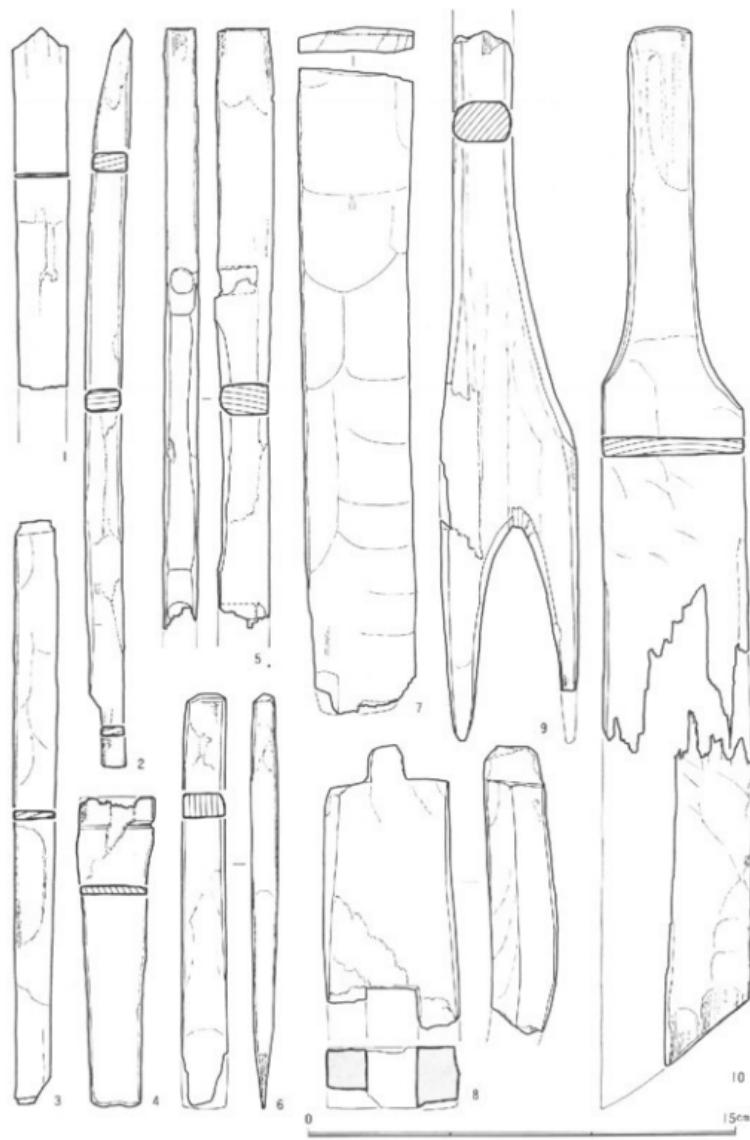


fig. 19 木製品実測図

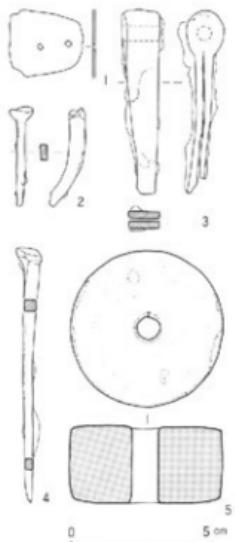


fig. 20 金属製品他実測図

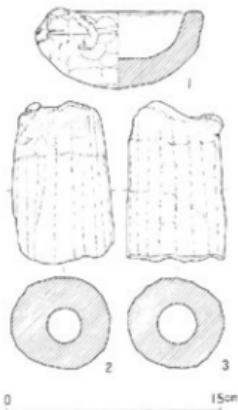


fig. 21とりべ・ふいご羽口
実測図

B. 金属製品・他 (fig.20)

金属製品は、銅製品、鉄製品、錢貨がごく少数ある。

帶金具 鈎帶の鉸具(1)が1点ある。板金具の破片で、2鉢留の痕跡がある。最大縦幅2.55cm、厚さ0.1cm。建物SB2621の西端柱據形出土。

鉄釘 3点ある。環頭釘(3)は叩き伸ばした足を両面から合わせ、頭部を環状に作った釘。足の先端を欠損する。土塙SK2747出土。折頭釘(8)は足の末端を平らに叩きのばしてから折り曲げたもの。全長9cm。包含層出土。

錢貨 和同開珎と宋錢が各1点ある。和同開珎は、開の字の門構えの上部が隸書風に開いた「隸開和同」である。宋錢は元豐通宝である。和同錢は小路西側溝SD2750から、宋錢は包含層から出土。

土製品他 土製円盤(5)は、直径5.5cm、厚み2.7cmの中央に0.8cmの孔を穿つ。灰黄色を呈し、黒い斑点が浮き出ている。東西溝SD2699出土。この溝からは東三坊大路東側溝SD650出土品に類似の灰釉陶器が出土しており、この製品も9世紀代であろう。石鍤はサスカイト製の凹基礎で、先端部のみ折損する。長3.6cm、最大幅1.65cm、重量2.1g。作りや形からみて、弥生時代中期初期のものであろう。

C. 鋼冶関係品 (fig.21)

鋳冶関係のとりべ、輪の羽口は、G区からまとめて出土した。

とりべ 片口のとりべ(1)の大破片がある。復原すると直径12cm、高さ5.6cmの小型品。胎土には直径0.8cmの小石を含む。表面には整形時の痕跡を留める。口縁端近くに沈線がめぐる。口縁端部と片口のまわりは火熱により変色し、一部が熔解している。

輪の羽口 輪からガに直接風を送る羽口は完形品が一点もなく、5箇分が復原できた。図示例は、先端部の破片で、表面に、長軸に平行した18・9の縫をのこす。曲率のある細長い材をあてて成形したのである。先端は熔解し、一部が濃青緑色に変色している。外径はともに7cm。内径は1が2.8cm、2が2.4cmである。



fig. 22 漆繪

D. 漆繪 (PL.17, fig.22)

3次調査区の包含層から文様を針書した漆器破片が出土した。漆器は木質部が失われ、両面の漆膜のみが遺存。文様は表にのみある。両面とも蒸地に布着せを行う。表には、この布が現存、1cm平方当りの経糸が17本である。裏面は膜面に圧痕のみが残る。X線写真では織目が非常に細く、織物の可能性がある。表の漆膜は、下端付近に布の端部があり、これが弧状を呈すことや、その外縁の刷毛目の方向からみて、この下端部が器物の端部に近いことがわかる。また、外縁の径は40cm前後に復原できる。盆か容器の蓋であろう。

文様は、細い針書で唐草と鳥を描く。唐草は外縁に沿って左から右に流れ、途中で外縁に沿う唐草と、中心部に向う唐草が分岐する。唐草の両側には次々に支葉が反転してゆく。支葉の表現はかなり退化している。右端には鳥の足が描かれ、その上方にも足と羽毛の一部が見え、片足で立つ状態を示す。全体を4分割し、中心部と周囲に鳥(伽陵頻伽?)を配し、間を反転する唐草文で埋める、対称性の強い構図か。退化した表現とはいえ、構図や遺跡の状況からみて、奈良末・平安初期を大きく下ることはないであろう。

4 木簡 (PL.18)

木簡は合計4点出土している。出土地はいずれも第3次西区であり、他の地区からは出ていない。出土遺構は(1)~(3)の3点が12・13坪の坪境小路東側溝(SD2740)から、(4)は中世の土取り穴(S K2770)から検出した。但し、(4)の木筒も内容や書体からみて奈良時代のものであるから、土取りに際して付近の土中にあった木筒が入り込んだのであろう。

以下、個々の木簡の内容を見ていく。

(1) □□□

□五□

受□

鎧□

棟13×(61)×3

6019

材の木目を横にして文字を書いている。天地は削って調整しているので、元来は幅の広い木筒であったのを二次的に削ったものであろう。材を横にして書く例は平城宮出土木簡の中にもかなりみられ、何行かにわたる帳簿様の文書木簡が多い。この木簡も「鎧」の授受に関する文書木簡であろう。鎧（カギ）の事例としては、諸司の公文を入れた庫の鎧・諸司の品物を出し入れする蔵の鎧・武具等を収納する兵庫の鎧、それに特殊なものとして大蔵の鎧や中務省に保管される諸国の不動倉の鎧などが考えられる。

(2) 舟越海松一古

116×15×4

6051

「海松」は海藻の一一種の「ミル」である。「舟越」は地名で、志摩國英虞郡船越郷のことであろう。志摩国は延喜式によれば海松の貢進國であり、また平城宮出土木簡にも「志摩國英虞郡船越郷_{丹上人作都口口}」(『平城宮木簡』、2776)といった例があり、奈良時代でも海松の貢進を確認できる。「一古」という単位は「一籠」と同じで、籠に入った量を示す。籠の大きさは延喜内膳式によると、長さ1尺2寸、広さ8寸、深さ4寸である。令の規定では、海産物の負担量は斤・両の重量で表わされるか、斗・升の容積で示されるが、実際には物品の形状に応じて通・編・籠といった単位で貢進されることも多い。海松も通常6斤が1籠に相当するから、平城宮出土のものも(2)の木筒とともに籠に入った同量の単位なのであろう。(2)は一たん貢進された海松を保管・整理するために付けられた物品付札であり、使用の際に廻棄されたものと推定される。

(3) 表裏両面に墨痕があり、表は「社」「社」などと見えるが判読しえない。あるいは習書かも知れない

(121)×(16)×4

6081

(4) 伊豆國賀茂郡□□□(郷々) □□□

(141)×(13)×6

6039

下半分が欠けているために断定はできないが、上端の側面に切り込みが入っていること等から考えると、伊豆国から貢進された物品に付けられた貢進物荷札であろう。和名抄によれば、同国賀茂郡には賀茂・月間・川津・三嶋・大社の各郷が存在するが、そのいずれとも決めがたい。

*数字は幅×横×厚さ（単位ミリメートル） 木簡の型式番号

IV まとめ

左京二条二坊十三坪遺跡は十三坪の南半部分を約3分の一発掘したわけであるが、各発掘区は相互に距離をもって離れているため、坪内の宅地割の変遷を復原することには一定の限界がある。しかし出土遺物からみて、遺構は8世紀前半に始まり10世紀の末に至るほぼ300年間にわたって建物の建て替えが行なわれたことは明らかであり、9・10世紀の建物の変遷が平城京内で始めて復原できる点で貴重な遺跡と言わねばならない。

以下では大きく6期の時期に分け、十三坪南半部分の宅地割の変遷をみるとする。

A期 建物2棟(SB2700, SB2650)、溝4条(SD2282, SD2370, SD2740, SD2750)井戸1基(SE2371)があり、十三坪北半では塀1条(SA2273)、溝2条(SD2265, SD2266)がある。坪を面する十二・十三坪境小路(SF2760)及び十三坪を南北に2分する溝(SD2282, SD2370)はこの期に形成される。

主屋は南北二面廊の東西棟建物SB2700で、副屋は北廊の東西棟建物SB2650である。SB2700を桁行7間、SB2650を桁行5間とするとき、SB2700の東西心は十二・十三坪境小路心より東へ100尺、SB2650の東西心は東へ195尺の位置になる。坪の南は二条大路に面し、坪の東は東二坊大路に面する訳であるが、左京二条二坊十二坪遺跡では二条大路に面して築地が検出されており、当十三坪でも築地で

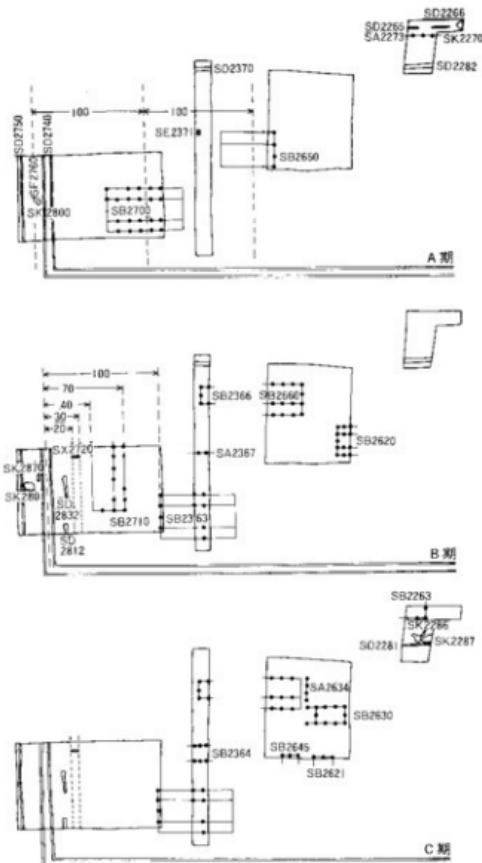


fig. 23 十三坪建物配置変遷図(1)

南限を廻したことは間違いないであろう。そして東二坊大路に面した東辺でも、築地で東限を廻したことと思われる。したがって坪内の出入口は十二・十三坪境小路に面した西辺と思われ、坪内の区画も坪境小路を基準にして、主屋を東へ100尺、副屋を東へ195尺の位置に配したものである。

B期 建物5棟(SB2363、SB2710、SB2660、SB2620、SB2366)、塀1条(SA2367)、溝6条(SD2282、SD2370、SD2740、SD2750、SD2832、SD2812)、木樁1条(SX2720)

がこの期に属する。A期の大
型建物2棟を廻し、新たに主

屋SB2363、副屋S2710を建てる。この期の建物の割り付けは、十二・十三坪境小路東側溝心を基準にしたと思われる。即ち東側溝心より20尺-30尺の位置に木樁SX2720を置き、40尺-70尺の位置に副屋SB2710を建て、100尺-170尺の位置に主屋SB2363を建てる。主屋SB2363の北方40尺の位置に日陰塀SA2367を作り、その後方及び東方に雜舎SB2366、SB2660、SB2620を配す。なお、木樁SX2720は副屋SB2710からの排水用暗渠と思われるが、この位置に築地を想定することができよう。SD2832・SD2812は築地の西南落構の可能性がある。

C期 B期の副屋SB2710を廻し、SB2790を建てる。主屋はB期からのSB2363が存続していたのであろう。雜舎群には変化がある。即ちB期の柵SA2367を廻し、同位置にSB2364を建てる。東方の雜舎SB2620を廻し、その北方に東西棟建物SB2630と塀SA2634を建てる。また、SB2630の南方30尺の位置に2棟の南北棟建物SB2645、SB2621を建てる。一方、十三坪北半部ではSB2263が建てられ、その南に溝1条(SD2281)と土塙2基(SK2286・SK2287)が形成された。

以上A～C期を通じて十三坪は南北に2分して使用されており、十三坪南半部における各期の主屋・副屋は二条大路に近接して造営されている。

D期 坪内に大きな変化が生じた時期。十三坪を南北に区画することを止め、東二坊大路

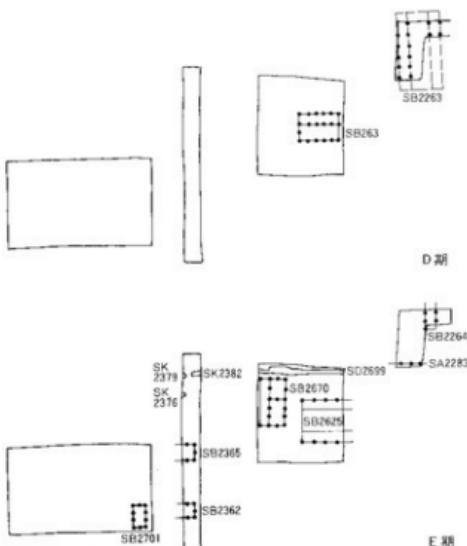


fig. 24 十三坪建物配置変遷図(2)

に面して主屋 S B2263、その西方に副屋 S B2631を建てた。坪の西半では、C期の建物はすべてなくなり、十二・十三坪境小路の側溝も埋められた。坪の東半に位置する二面廂付大型建物 S B2263は新たに造営されたが、副屋である S B2631はC期の建物 S B2630を廃し、同位置に北廂を付して建て替えたものである。S B2630から S B2631への建て替えは継続性を示すが、大型建物 S B2263の新たな出現は坪内に大きな変化が生じたことを示している。

E期 坪内は東西溝(S K2382、S K2379、S D2699)と東西廊(S A2283)とで南北に区画され、再び坪内を南北に2分して使用されはじめる。この時期には主屋 S B2625と副屋 S B2670が建てられる。主屋の西方では、南側柱筋に合わせて S B2365を建て、その南方に S B2362、その西方に S B2701の雜倉群を配する。

F期 大型建物はまったくなくなり、小型の雜倉群が3時期建て替えられる。F₂期では建物が北から東へ3°振れており、周辺の条坊遺跡が廃絶していることをうかがわせる。

G期 坪西半部分で多くの土塙が掘られ、奈良～平安時代の遺構が破壊された。

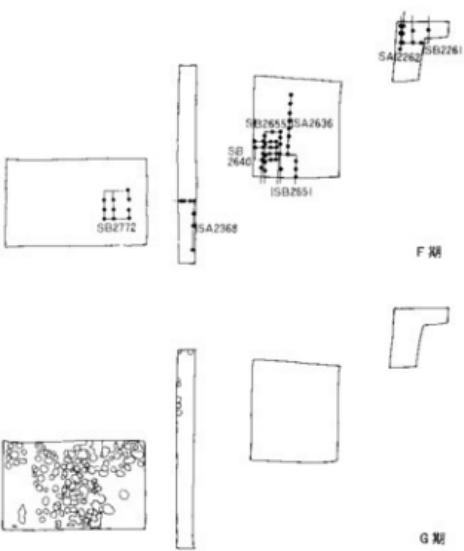


fig. 25 十三坪建物配図変遷図(3)

実年代の比定 A期の遺構では、柱穴出土の良好な遺物はない。しかしB期の主屋 S B2363の柱穴から平城II～III期の土器が出土しており、A期の主屋 S B2700をB期の主屋 S B2363へ建て替えたことは柱穴の切り合いで明らかである。この事実と、土塙 S K2800、S K2270から平城II期の土器が大量に出土していることから、A期を8世紀前半に置くことができる。B期では主屋 S B2363の柱穴から平城II～III期の土器が出土している。B期を8世紀中葉に置くことができる。C期では S B2263から平城V期の土器、土塙 S K2286、S K2287から長岡宮期の土器が出土している。C期を780年頃から長岡宮の年代に置くことができる。D期の遺構では副屋 S B2630から平城雅期の土器が出土している。また主屋 S B2263はC期の建物 S B2263を廃して建てられたことは明らかであり、S B2263から平

城V期の土器が出上しているから、SB2263はそれ以降となる。D期は9世紀前半代であろう。E期では、SB2670、SK2690、SD2699、SK2382、SK2379、SK2376から平城京東三坊大路東側溝SD650A出土土器併行の土器が出土しており、9世紀中葉から後半に年代を置くことができる。F期では、F₃期に属するSB2640から、東三坊大路東側溝SD650B出土土器よりは新しい型式で、薬師寺西僧房床面出土土器より古い型式の土器が出土しており、西僧房焼失(973年)以前の10世紀前半~中葉の時期にF期を置くことができる。

阿弥陀浄土院との関連

次に遺物と遺構との関連から、十三坪内の状況を復原してみよう。

土器は平城宮II期(729~749頃)とSD650A期(9C中葉~後半)に属するものが最も多く、長岡宮前後のものがこれに次ぐ。遺構では、A・B期、D期、E期において大型建物を新たに造営しており、遺構の画期が土器の出土量に対応しているのである。即ち、A・B期とE期とが、十三坪内で最も居住密度の濃い時期であった。

瓦については、本調査区出土軒瓦のうち10型式が法華寺阿弥陀浄土院と同範囲にあることが注目される。10型式中9型式は、十三坪の西側部分である十二・十三坪境小路とその側溝縁邊から出土しており、坪中心部では出土していない。遺構区分におけるC期には、大型建物の新たな造営はないから、発掘調査地内で使用したことはできない。未発掘地の十二坪東半部か、十三坪北半部に瓦葺建物があるのだろう。この未発見の瓦葺建物は、9型式の同範囲をもつことから、阿弥陀浄土院と密接な関係をもつことは容易に推定されよう。10型式中残りの1型式である6713Aは、3次東発掘区で7個体出土しており、他の発掘区では皆無である。6713Aは、阿弥陀浄土院創建軒平瓦6714A型式の系譜を受け継ぐが、文様がかなり退化しており、かつ瓦当側縁をまるくケズルことから年代の新しいものである。年代の下限は、SK2680から出土したことから、SD650Aの時期におくことができ、瓦の示す年代は、8世紀の最終末から9世紀後半代の間に置くことができる。この6713A型式の瓦が3次東で検出しE期としたSB2625に算かれた可能性も否定できない。しかし7個体という数からみれば、十三坪の北半部分に瓦葺建物があって、それが流れ込んだ可能性も否定できない。いずれにしても、8世紀の最終末から9世紀後半代において、十三坪が阿弥陀浄土院と密接な関連を有したことは認めてよいように思われる。天平宝字三年(759年)光明皇后によって発願された阿弥陀浄土院の平安時代における状態は不明だが、平城宮80次阿弥陀浄土院の調査ではSD840、SD845から平安時代の遺物が出土しており、小範囲の発掘でも9世紀の灰釉陶器・綠釉陶器が出土することが多いことからみれば、9世紀において浄土院の法燈は衰えていないとみてよいであろう。十三坪内におけるD・E期の繁栄ぶりは、こうした阿弥陀浄土院との関連で考えてみる必要があるだろう。

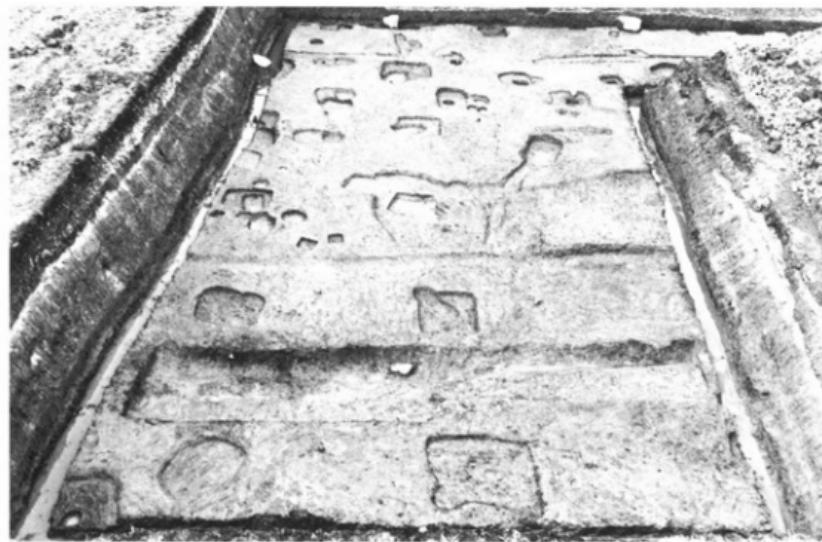


PL. 1

調査地周辺航空写真(昭和54年3月撮影 1/4000)奈良市提供



1 第1次調査区全景(北西から)



2 第1次調査区遺構(南から)



第2次調査区全景(南から)



1 第3次東調査区全景(北から)



2 SK2690・SD2699(東から)



1 SB2630・SB2631(西から)



2 SB2660・SB2670(東から)



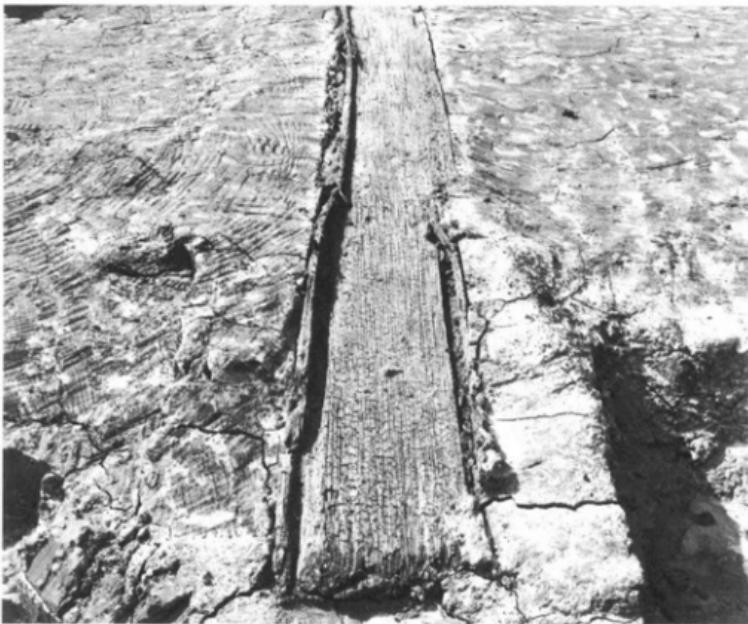
1 第3次西調査区全景(東から)



2 第3次西調査区東部(北から)



1 SD2740(北から)



2 SX2720(東から)



10



14



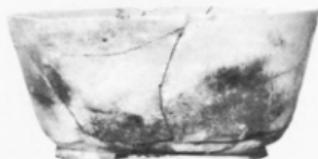
6



15



20



16



19



7



17



3



8



18



25



23



26



101



151



61



127



62



144



63



136



82



133



83



84



140



115



116



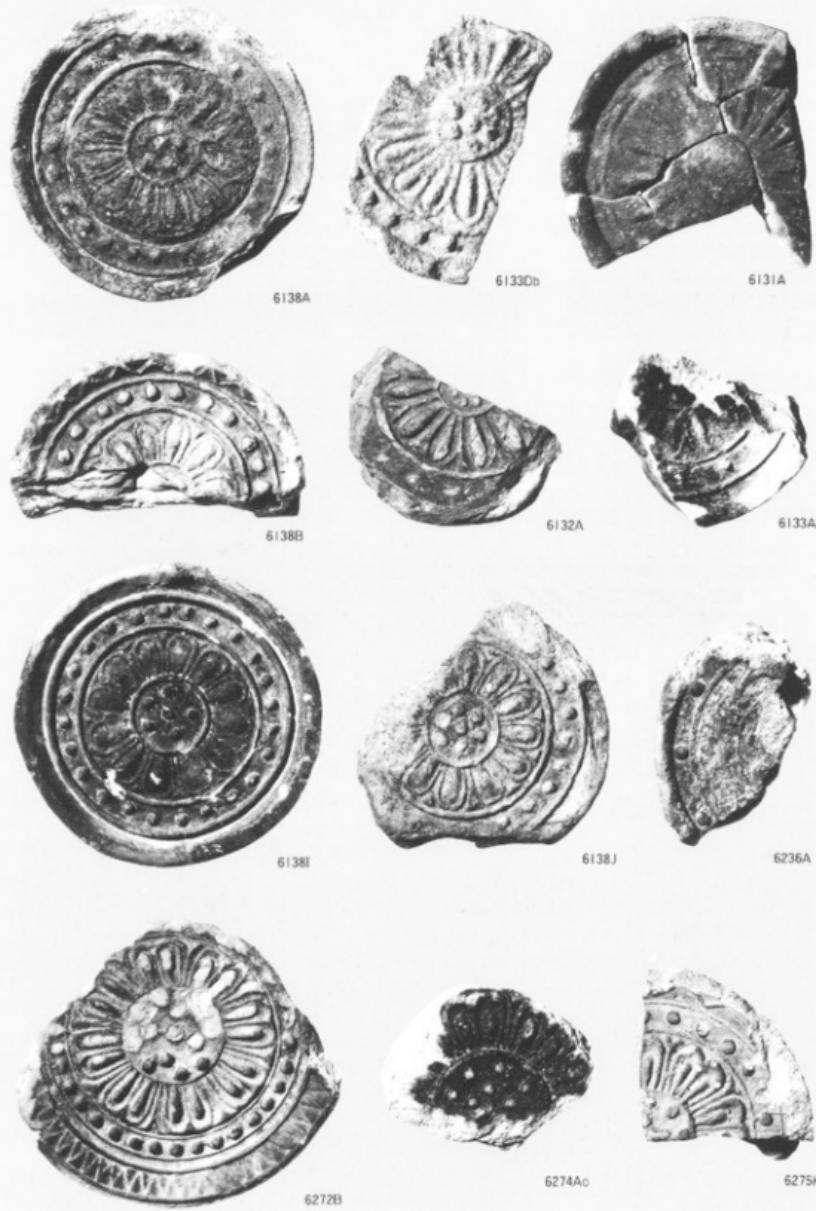
119



124



123





6225A



6282Bb



6225C



6296A



6282D_b



6308A



6308I



6311A



6311F



6311B



6313A



6313C



6313G



7283A



6316A



6643C



6640A



6664K



6664F



6685B



6704A



6682B



6663C



6663B



6721Hb



6721Ga



6721Gb



6691A



6768A



6767A



6768B



6768C



6767B



平安末以降



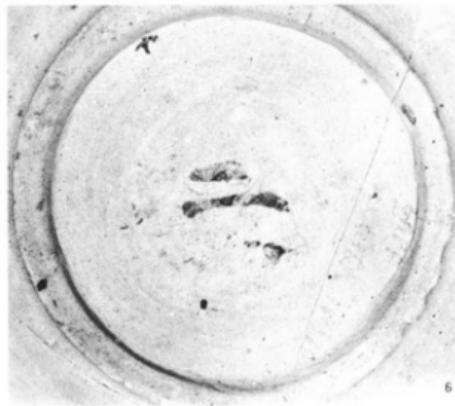
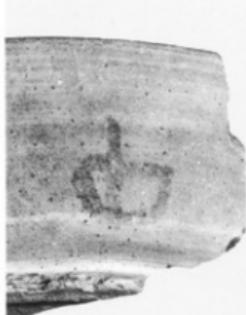
6713A





漆塗 ▲漆表面の針書

▼ソフテックス写真(左:表の漆膜、右:裏の漆膜の一部)



木簡・墨書土器写真

平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月31日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

印刷 関西プロセス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13



奈良国立文化財研究所 1984.3

